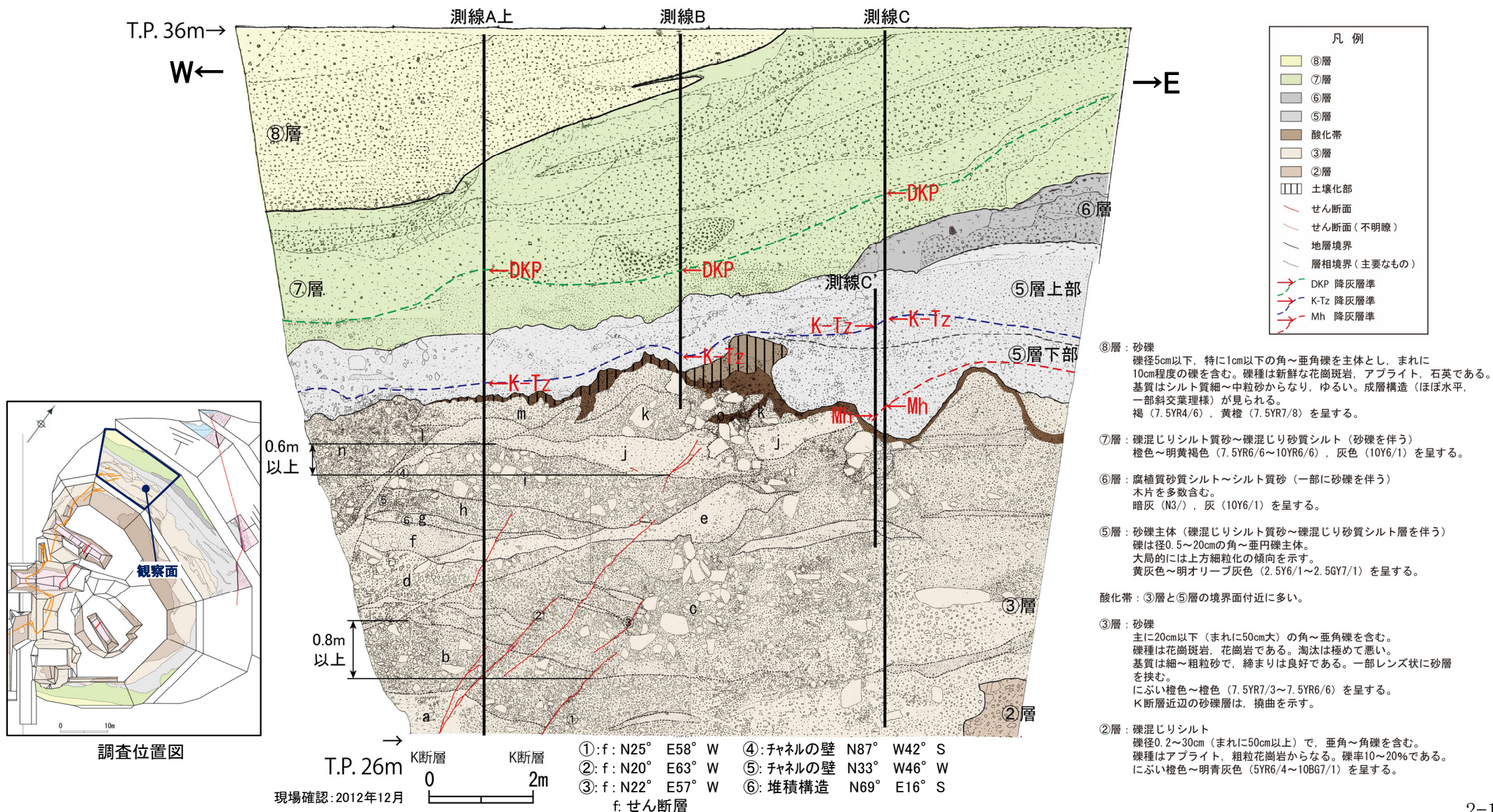


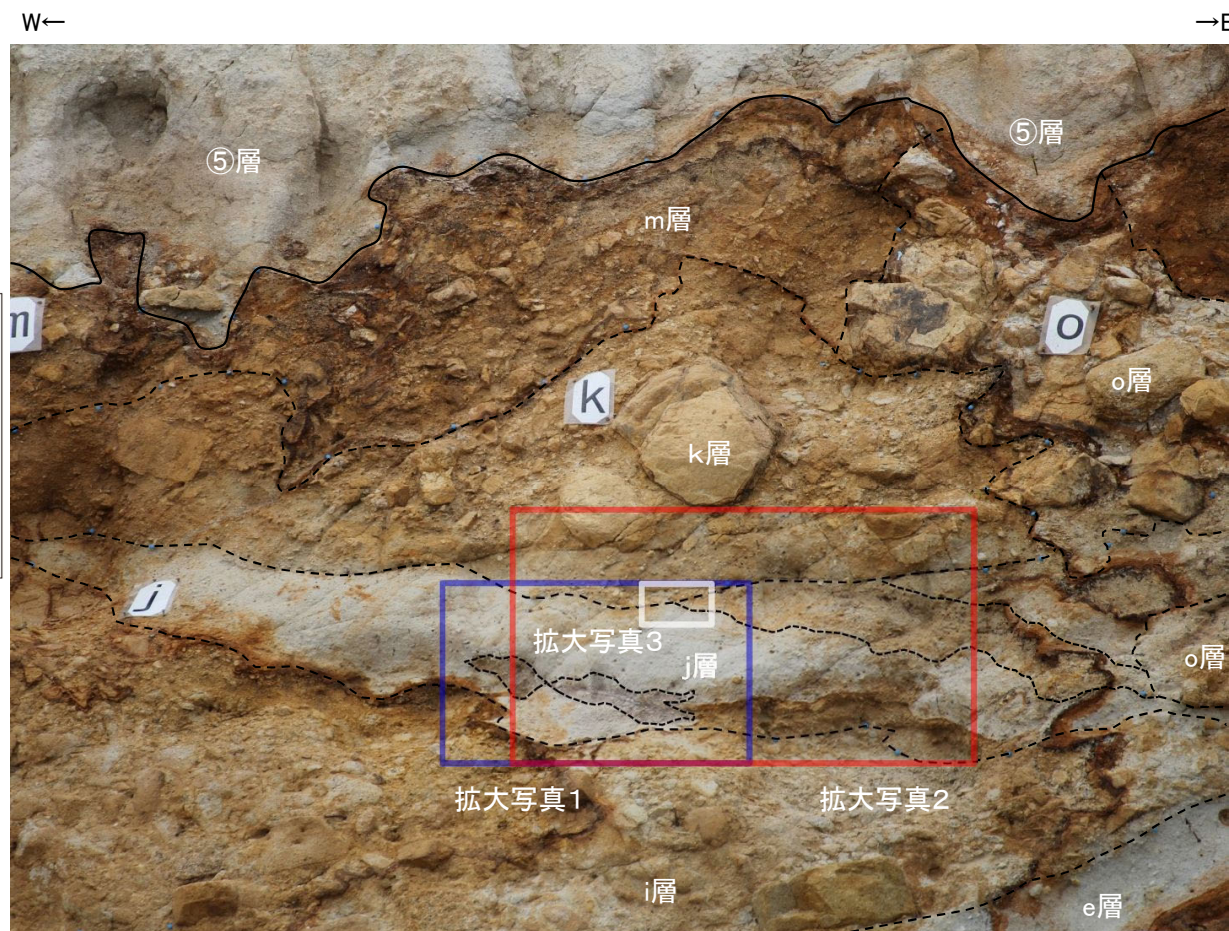
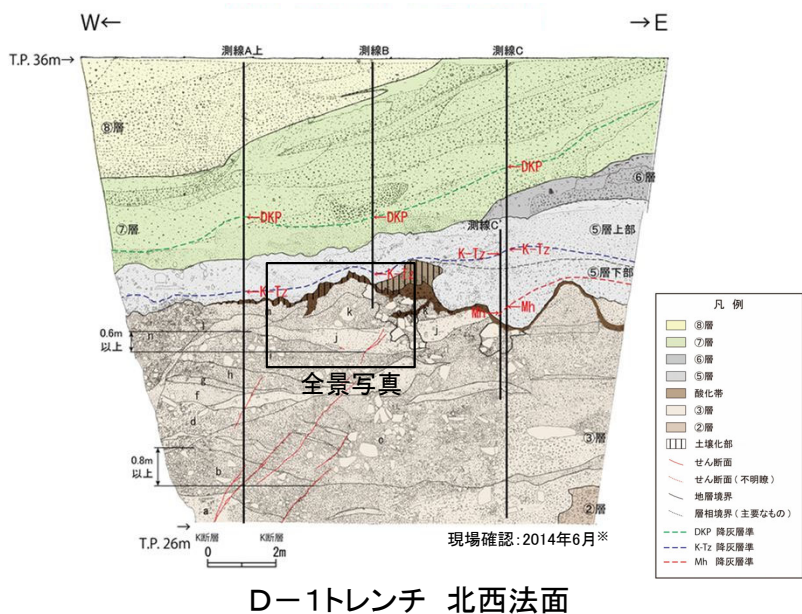
2.3.1 活動性評価結果(北西法面)

- K断層は、D-1トレンチ北西法面では、MIS6以前に堆積したm層の下位の地層であるk層に**変位・変形を与えていない**。
- K断層は、③層中のj層までの地層に**変位や変形を与えており、j層中の腐植層や砂礫層の層理は東へ傾斜している**。
- 撓曲変形を含めたj層基底の鉛直変位量は**0.6m以上**である。
- 一方、j層直上のk層は、**下位のj層を傾斜不整合関係で覆っており、k層の基底及びk層中の砂層はほぼ水平である**。
- **上田・谷(1999)によれば、逆断層運動を模擬した断層模型実験では、「変位・変形は、上方に向かって断層沿いのずれ変位主体から撓曲等の連続的変形主体に変化する傾向が認められる。」とされており、K断層がD-1トレンチ北西法面の③層の上部に位置するj層において変形が主体となっている状況と整合している。**
- **k層がj層の一部の上位にしか分布しなくとも、j層をk層が傾斜不整合で覆っていることには変わりはないため、上載地層として評価は妥当である。**



2.3.1 活動性評価(北西法面) 地層の堆積状況 (D-1トレンチ北西法面(その1))

- K断層は、③層中のj層までの地層に変位や変形を与えている。
- 一方、j層直上のk層は、下位のj層を傾斜不整合関係で覆っており、k層の基底はほぼ水平である。



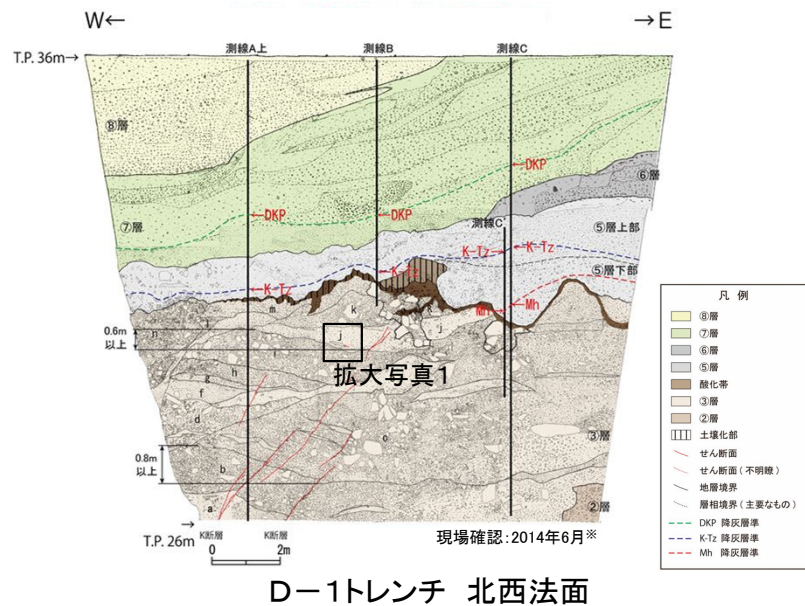
※K断層による地層の変形範囲について、より定量的な整理を行うため再観察を実施した。



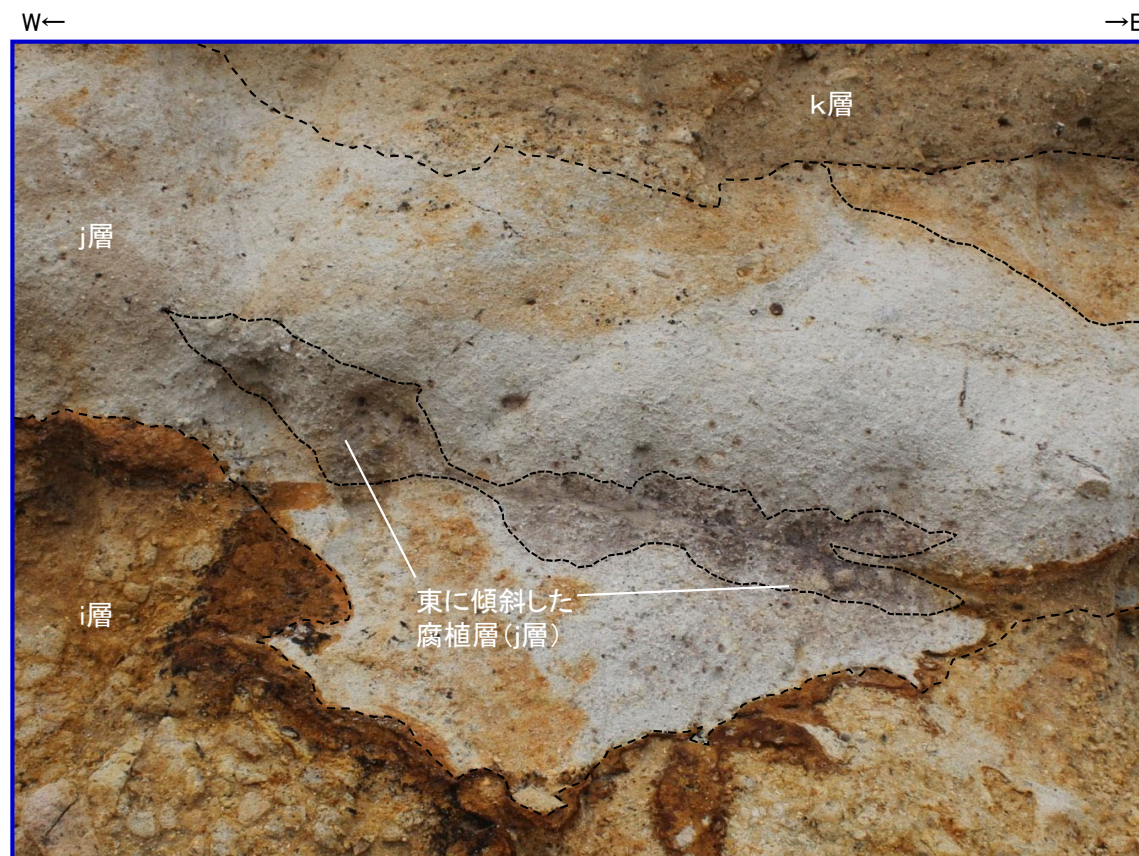
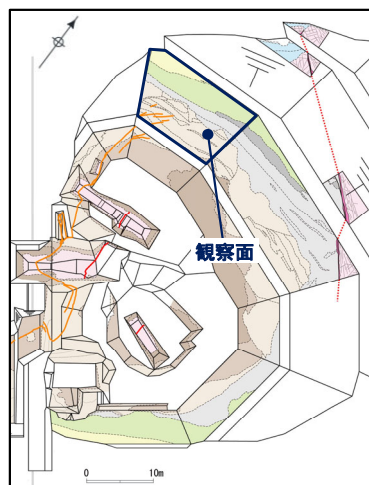
調査位置図

2.3.1 活動性評価(北西法面) 地層の堆積状況 (D-1トレンチ北西法面(その2))

・K断層は、③層中のj層までの地層に変位や変形を与えており、j層中の腐植層は東へ傾斜している。

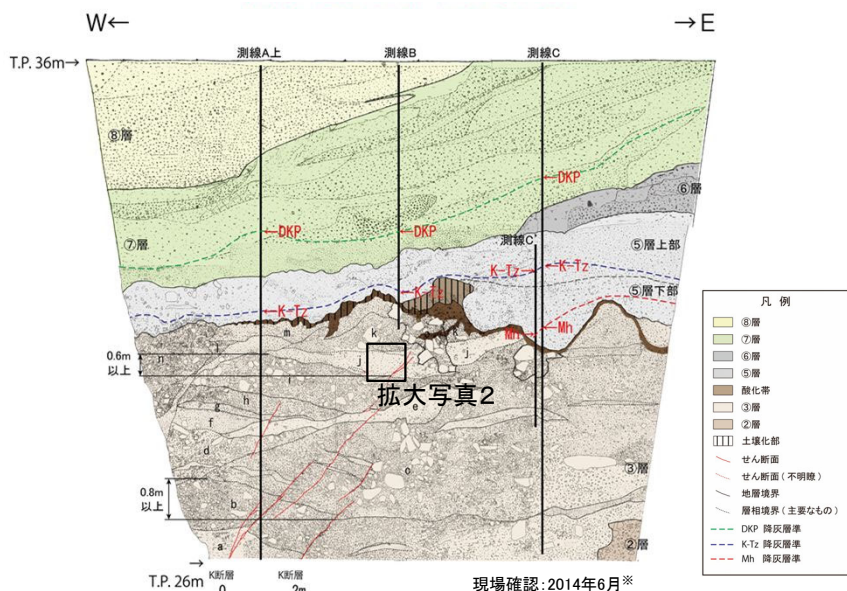


※K断層による地層の変形範囲について、より定量的な整理を行うため再観察を実施した。



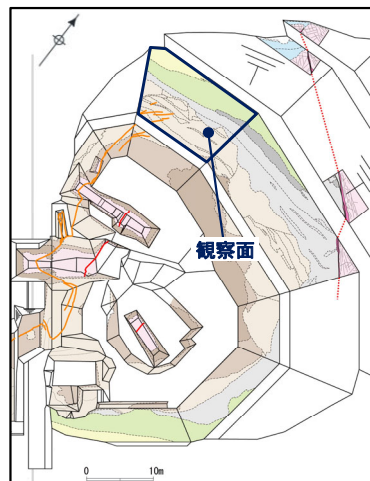
2.3.1 活動性評価(北西法面) 地層の堆積状況 (D-1トレンチ北西法面(その3))

- K断層は、③層中のj層までの地層に変位や変形を与えており、j層中の腐植層は東へ傾斜している。
- 一方、j層直上のk層は、下位のj層を傾斜不整合関係で覆っており、k層の基底及びk層中の砂層はほぼ水平である。



D-1トレンチ 北西法面

※K断層による地層の変形範囲について、より定量的な整理を行うため再観察を実施した。



調査位置図



東に傾斜した腐植層 (j層)

拡大写真2

撮影:2014年7月

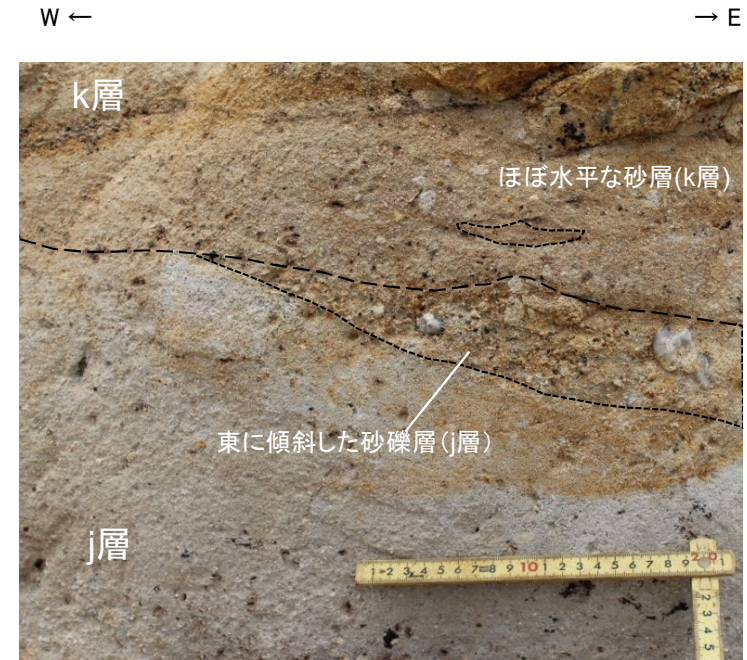
2.3.1 活動性評価(北西法面) 地層の堆積状況 (D-1トレンチ北西法面(その4))

- K断層は、③層中のj層までの地層に変位や変形を与えており、j層中の砂礫層の層理は東へ傾斜している。
- 一方、j層直上のk層は、下位のj層を傾斜不整合関係で覆っており、k層の基底及びk層中の砂層はほぼ水平である。



撮影：2014年8月

拡大写真3

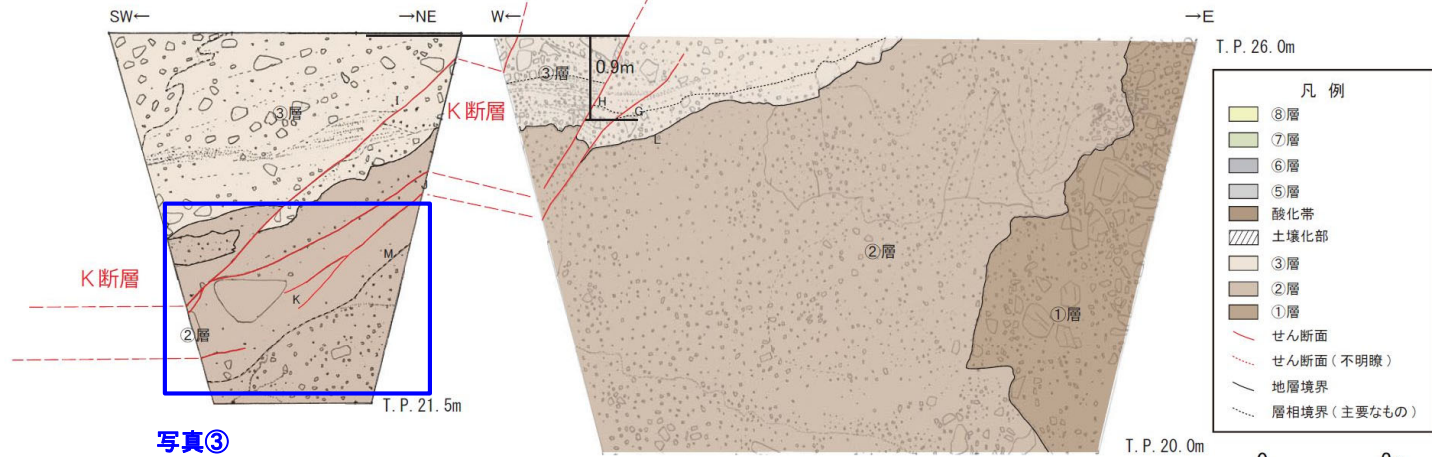
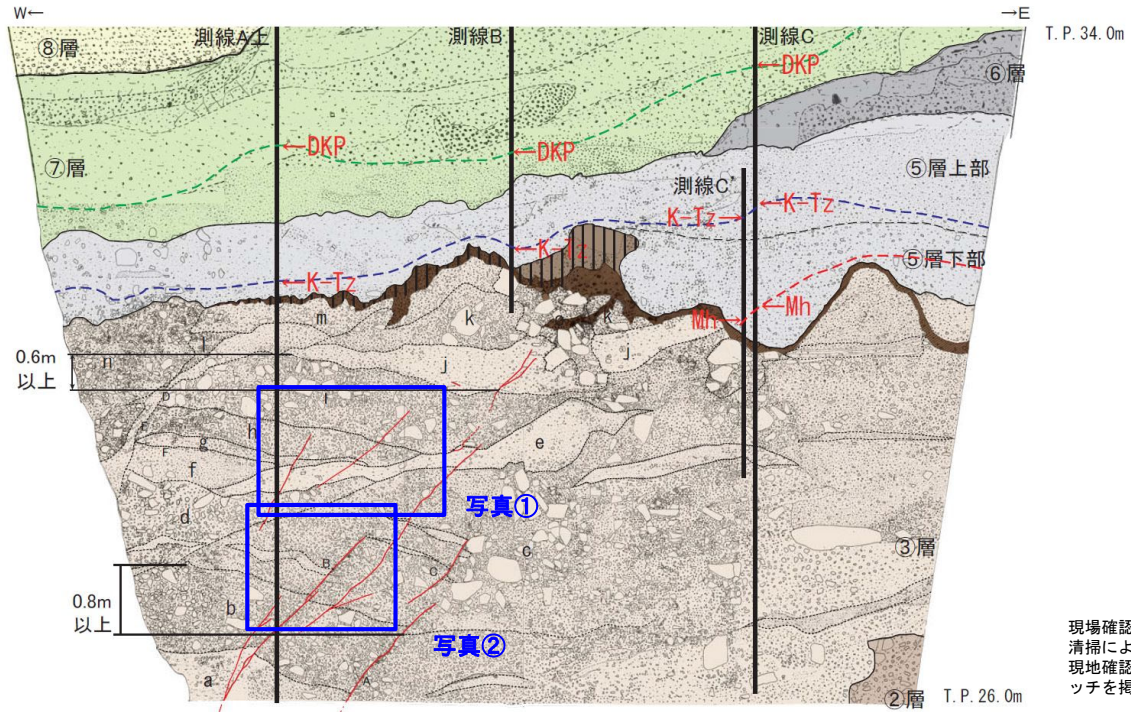


撮影：2014年8月

j層／k層境界

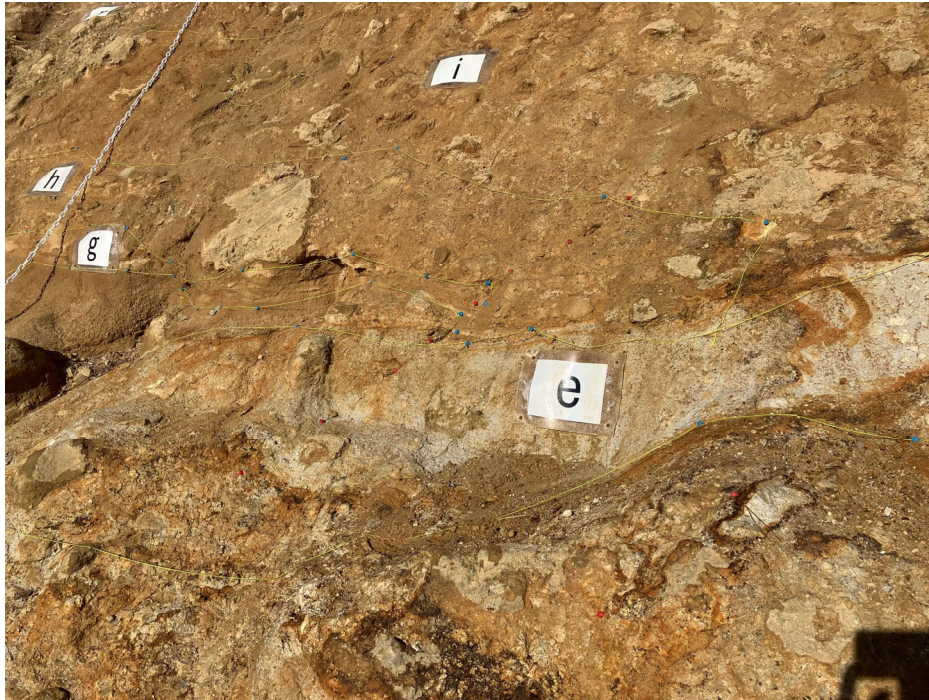
2.3.1 活動性評価(北西法面付近 追加せん断面)

- ⑧層：砂礫
礫径50cm以下、特に10cm以下の角～亜角礫を主体とし、まれに10cm程度の礫を含む。礫種は新鮮な花崗斑岩、アブライト、石英である。基質はシルト質細～中粒砂からなり、ゆるい。成層構造（ほぼ水平、一部斜交葉理様）が見られる。褐（7.5YR4/6）、黄橙（7.5YR7/8）を呈する。
- ⑦層：礫混じりシルト質砂～礫混じり砂質シルト（砂礫を伴う）
橙色～明黄褐色（7.5YR6/6～10YR6/6）、灰色（10Y6/1）を呈する。
- ⑥層：腐植質砂質シルト～シルト質砂（一部に砂礫を伴う）
木片を多数含む。暗灰（N3/）、灰（10Y6/1）を呈する。
- ⑤層：砂礫主体（礫混じりシルト質砂～礫混じり砂質シルト層を伴う）
礫は径0.5～20cmの角～亜角礫主体。大局的には上方細粒化の傾向を示す。黄灰色～明オリブ灰色（2.5Y6/1～2.5GY7/1）を呈する。
- 酸化帯：③層と⑤層の境界面付近に多い。
- ③層：砂礫
主に20cm以下（まれに50cm大）の角～亜角礫を含む。礫種は花崗斑岩、花崗岩である。淘汰は極めて悪い。基質は細～粗粒砂で、締まりは良好である。一部レンズ状に砂層を挟む。にぶい橙色～橙色（7.5YR7/3～7.5YR6/6）を呈する。K断層近辺の砂礫層は、拗曲を示す。
- ②層：礫混じりシルト
礫径0.2～30cm（まれに50cm以上）で、亜角～角礫を含む。礫種はアブライト、粗粒花崗岩からなる。礫率10～20%である。にぶい橙色～明青灰色（5YR6/4～10B6/1）を呈する。
- ①層：砂礫
礫径0.5～30cm（最大100cm以上）で、亜角～角礫を含む。礫種は花崗斑岩、粗粒花崗岩、アブライト、石英である。淘汰は悪い。基質は砂質シルトで、締まりは良好である。黄褐色（10YR5/8）を呈する。



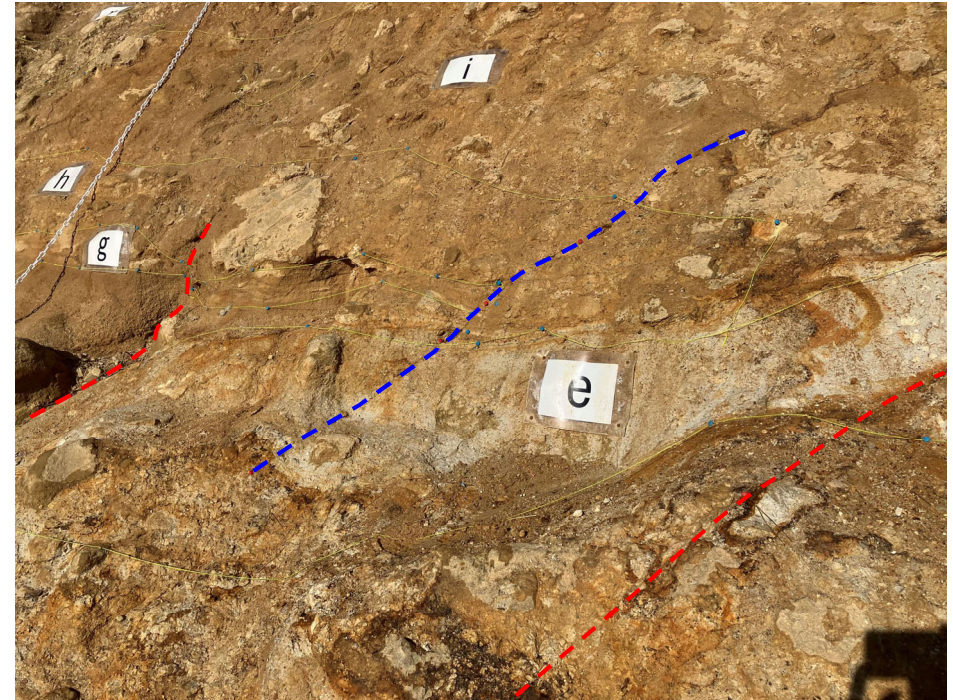
- A：せん断面：N25° E58° W
B：せん断面：N20° E63° W
C：せん断面：N22° E57° W
D：層理面（チャネル壁）：N87° W42° S
E：層理面（チャネル壁）：N33° W46° W
F：層理面（堆積構造）：N69° E16° S
G：せん断面：N41° E60° NW
見かけ15cm変位（逆断層）
H：せん断面：N33° E72° NW
見かけ10cm変位（逆断層）
I：せん断面：N11° W64° W
J：せん断面：N9° W44° W
K：せん断面：N13° E48° NW
L：層理面（②層③層境界）：N47° W20° SW
M：層理面：N19° E56° NW

2.3.1 活動性評価(北西法面) (D-1トレンチ北西法面(その1) 追加せん断面)



写真①:スケッチ追加K断層

撮影:2023年11月



写真①:スケッチ追加K断層(断層トレース)
※追加したせん断面は青線で表示

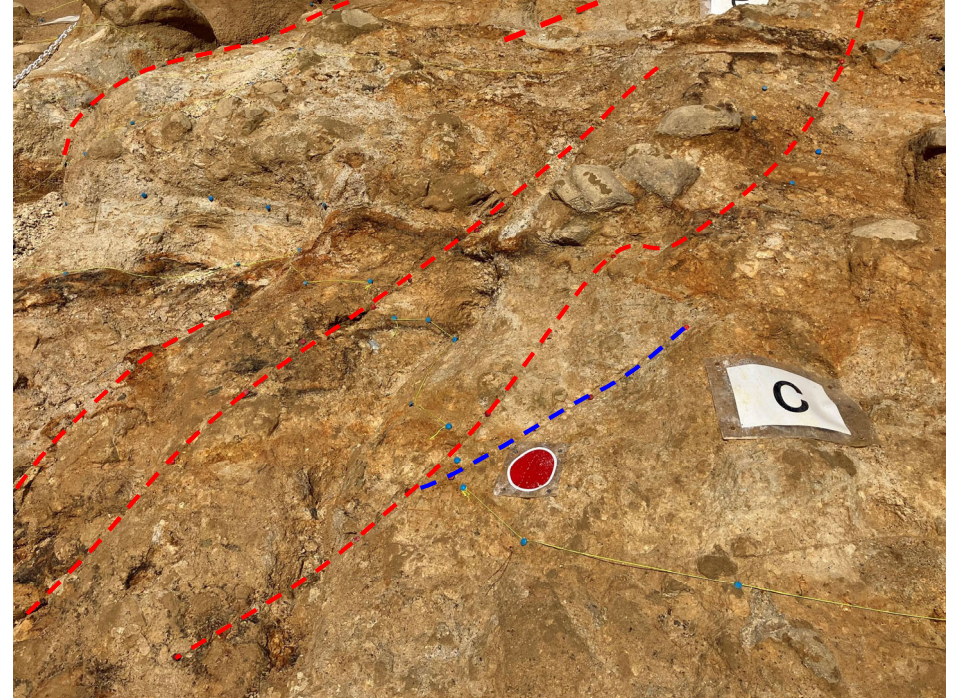
撮影:2023年11月

2.3.1 活動性評価(北西法面) (D-1トレンチ北西法面(その2) 追加せん断面)



写真②:スケッチ追加K断層

撮影: 2023年11月



1m

写真②:スケッチ追加K断層(断層トレース)
※追加したせん断面は青線で表示

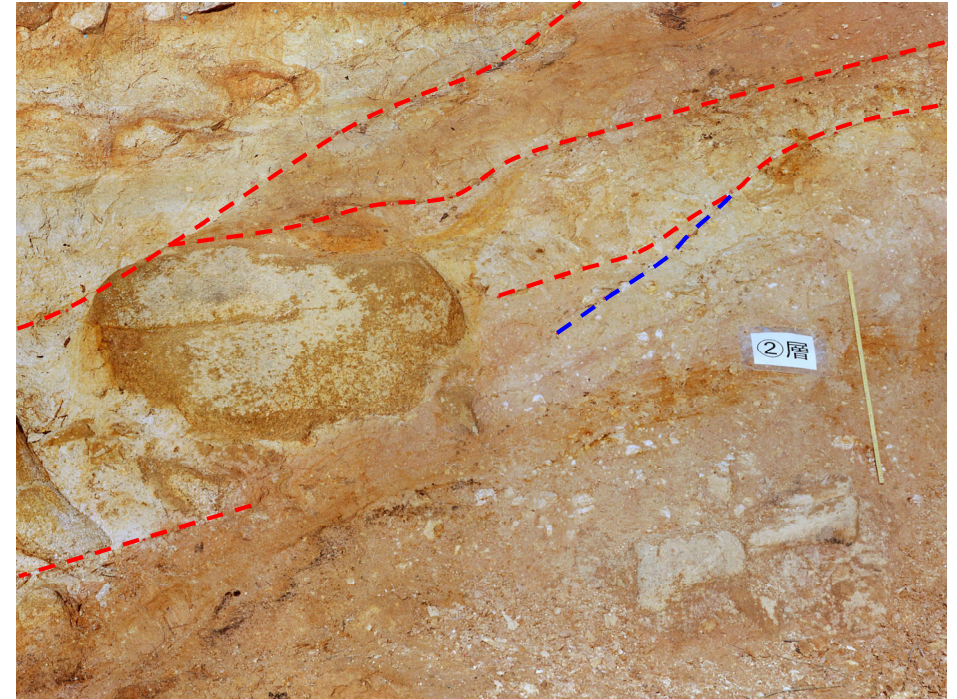
撮影: 2023年11月

2.3.1 活動性評価(北西法面) (D-1トレンチ北西法面付近 追加せん断面)



写真③:スケッチ追加K断層

撮影: 2023年11月

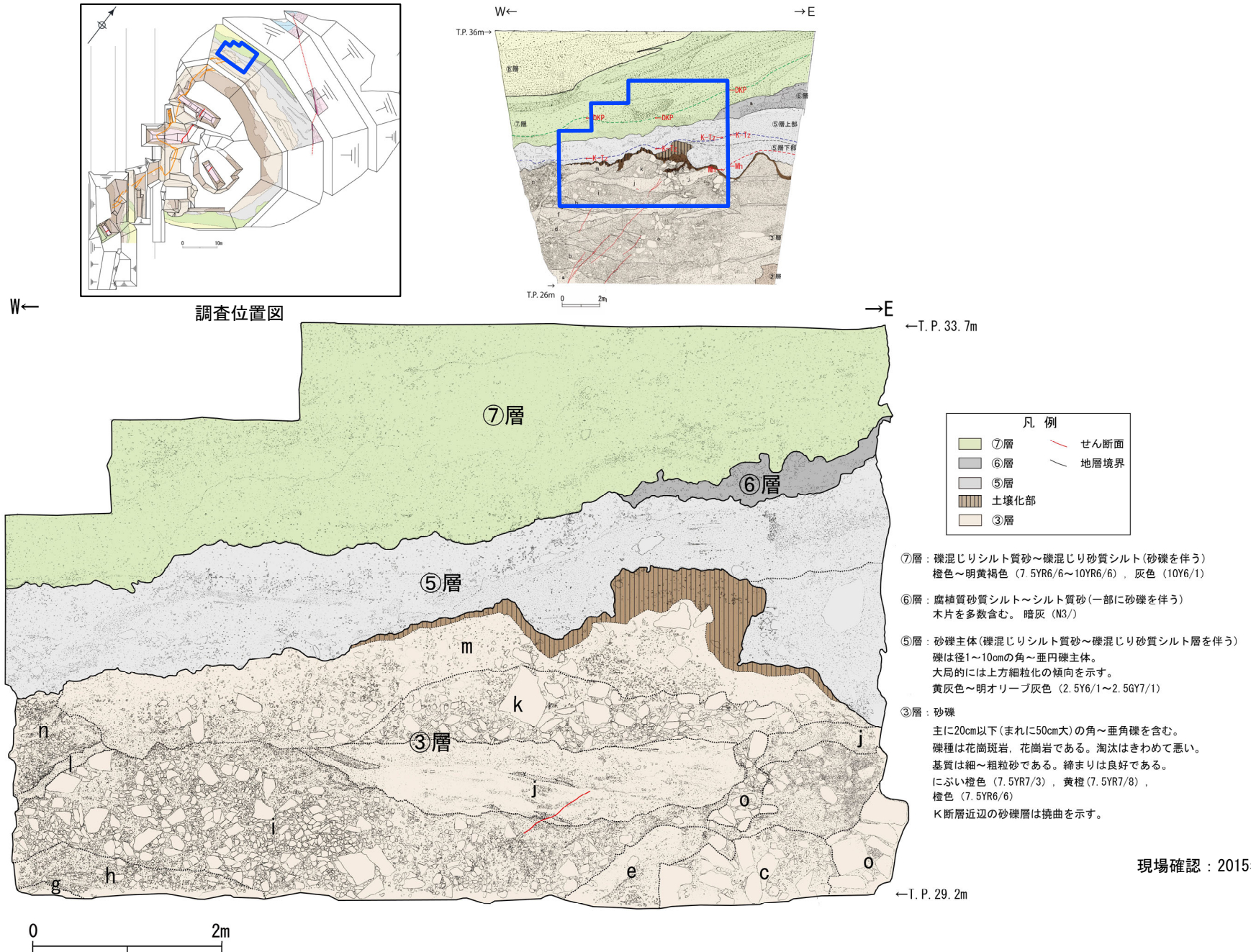


写真③:スケッチ追加K断層(断層トレース)
※追加したせん断面は青線を表示

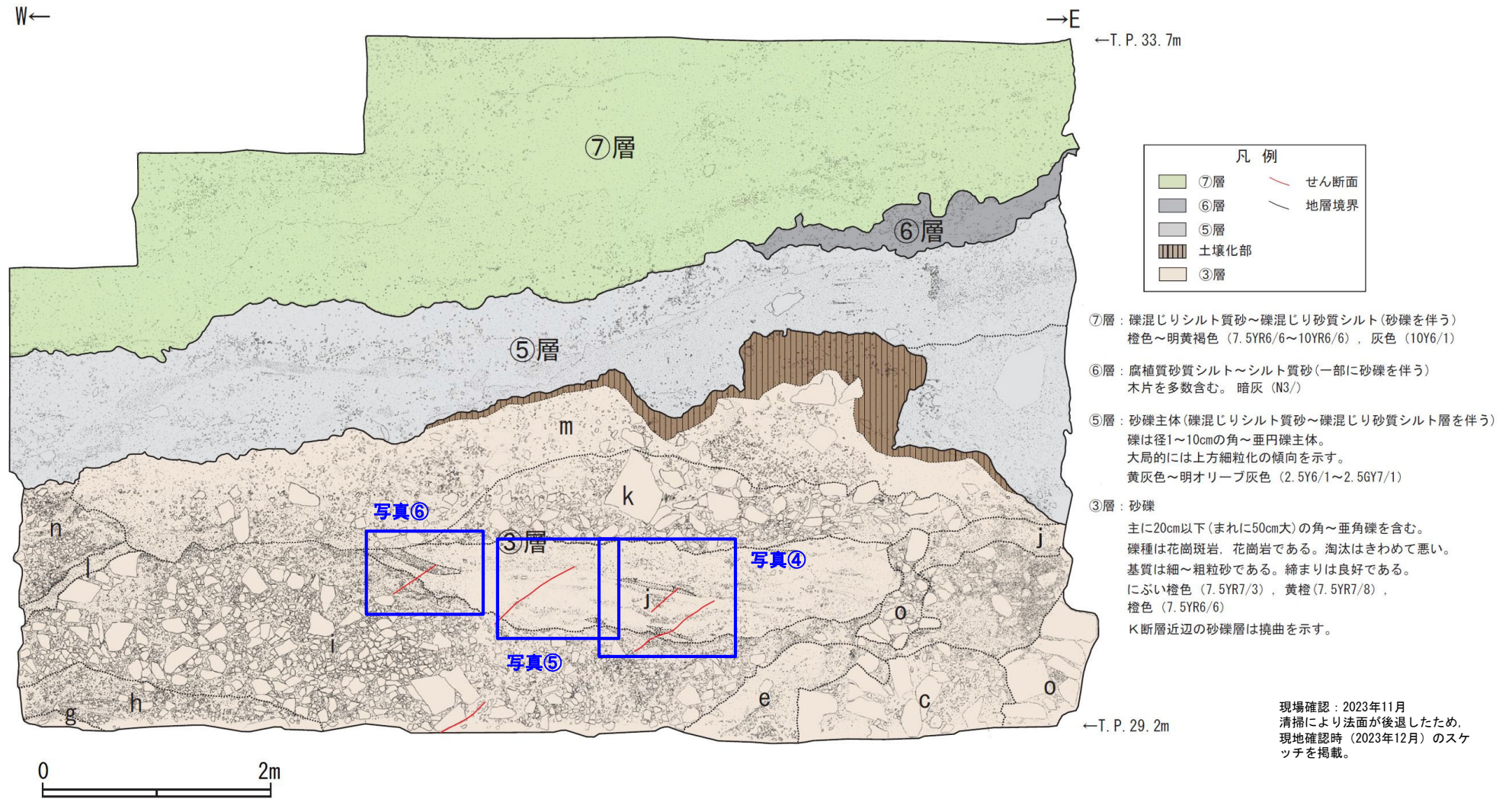
撮影: 2023年11月

2.3.1 活動性評価(北西法面) 北西法面 掘り込み後の観察結果 (法面掘り込みスケッチ)

- k層はo層によってチャンネル状に削られていたことから、同法面をさらに奥行方向に掘削した。
- その結果、o層の分布範囲は狭小となり、i層とk層との傾斜不整合関係やk層基底の水平性がより明瞭となった。



2.3.1 活動性評価(北西法面) 追加せん断面 (法面掘り込みスケッチ)

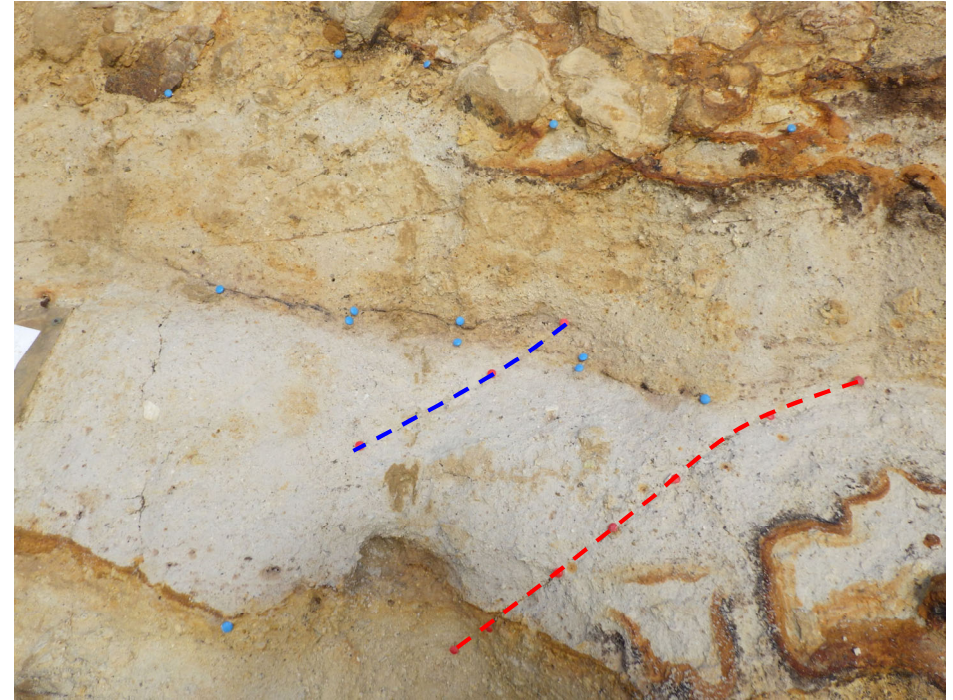


2.3.1 活動性評価(北西法面) 追加せん断面 (D-1トレンチ北西法面 掘り込み後(その1))



写真④:スケッチ追加K断層

撮影: 2023年11月



写真④:スケッチ追加K断層(断層トレース)
※今回追加したせん断面は青線で表示

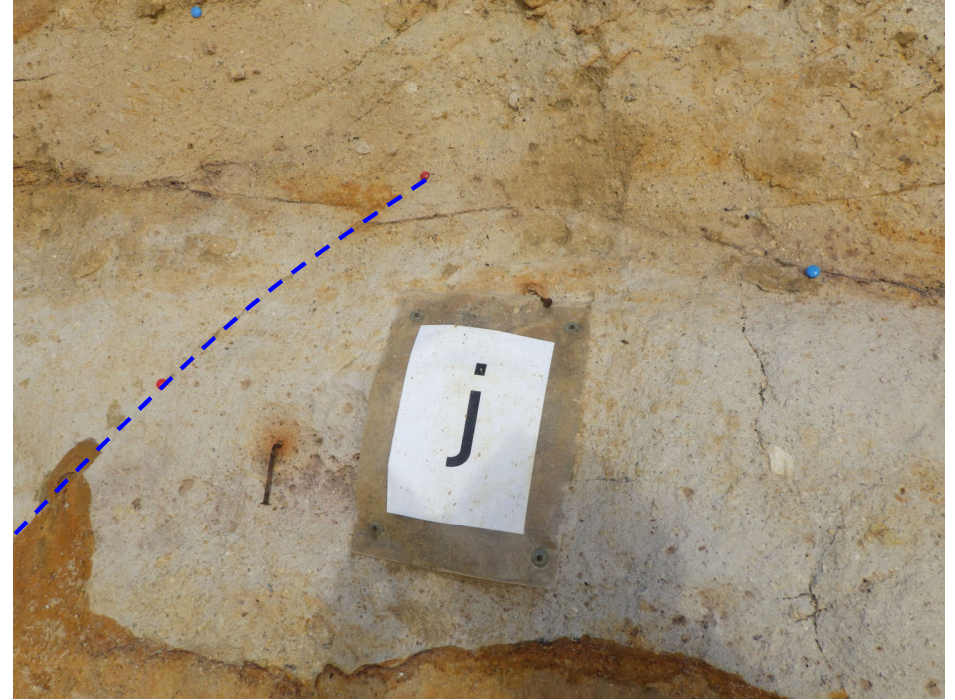
撮影: 2023年11月

2.3.1 活動性評価(北西法面) 追加せん断面 (D-1トレンチ北西法面 掘り込み後(その2))



写真⑤:スケッチ追加K断層

撮影:2023年11月



写真⑤:スケッチ追加K断層(断層トレース)
※今回追加したせん断面は青線で表示

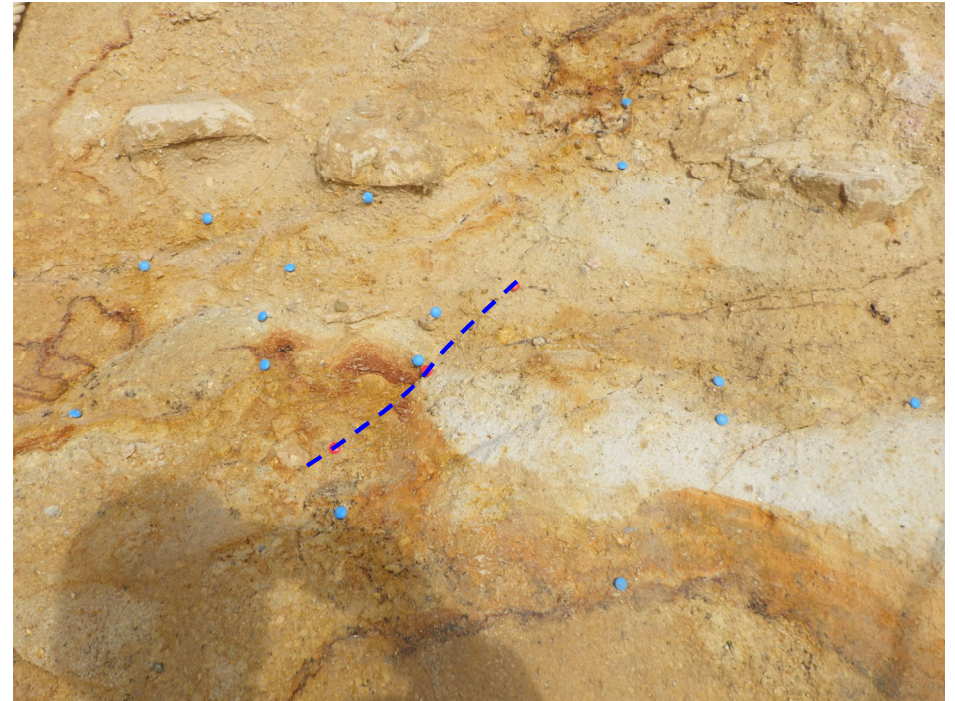
撮影:2023年11月

2.3.1 活動性評価(北西法面) 追加せん断面 (D-1トレンチ北西法面 掘り込み後(その3))



写真⑥:スケッチ追加K断層

撮影: 2023年11月



25cm

写真⑥:スケッチ追加K断層(断層トレース)
※今回追加したせん断面は青線を表示

撮影: 2023年11月

2.3.1 活動性評価(北西法面) 逆断層運動を模擬した逆断層模型実験

- 上田・谷(1999)によれば, 逆断層運動を模擬した断層模型実験では, 「変位・変形は, 上方に向かって断層沿いのずれ変位主体から撓曲等の連続的変形主体に変化する傾向が認められる。」とされており, K断層がD-1トレンチ北西法面の③層の上部に位置するj層において変形が主体となっている状況と整合している。

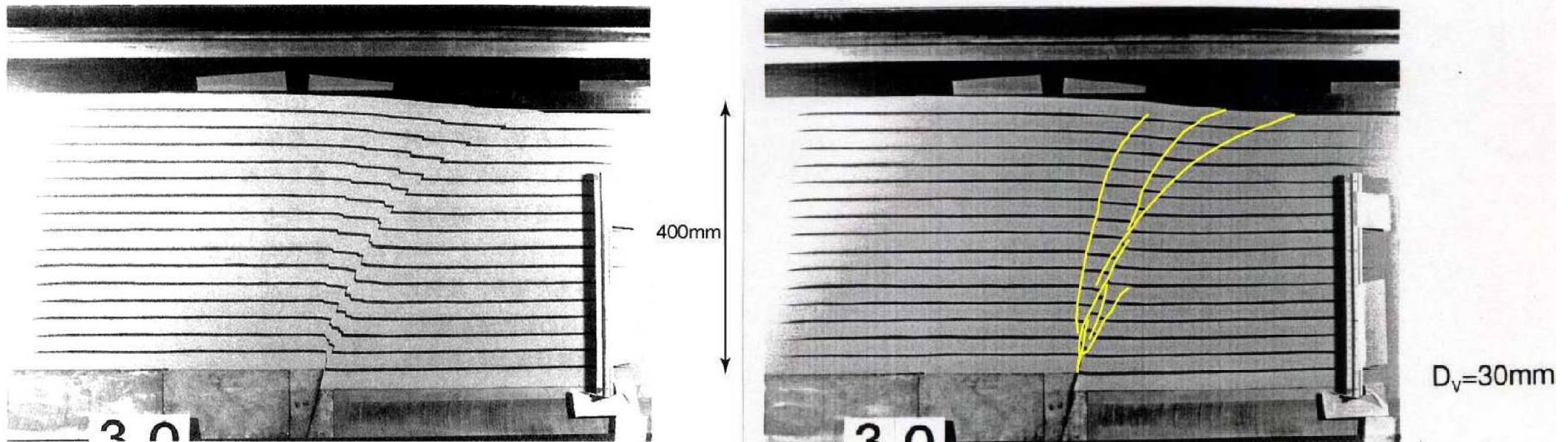
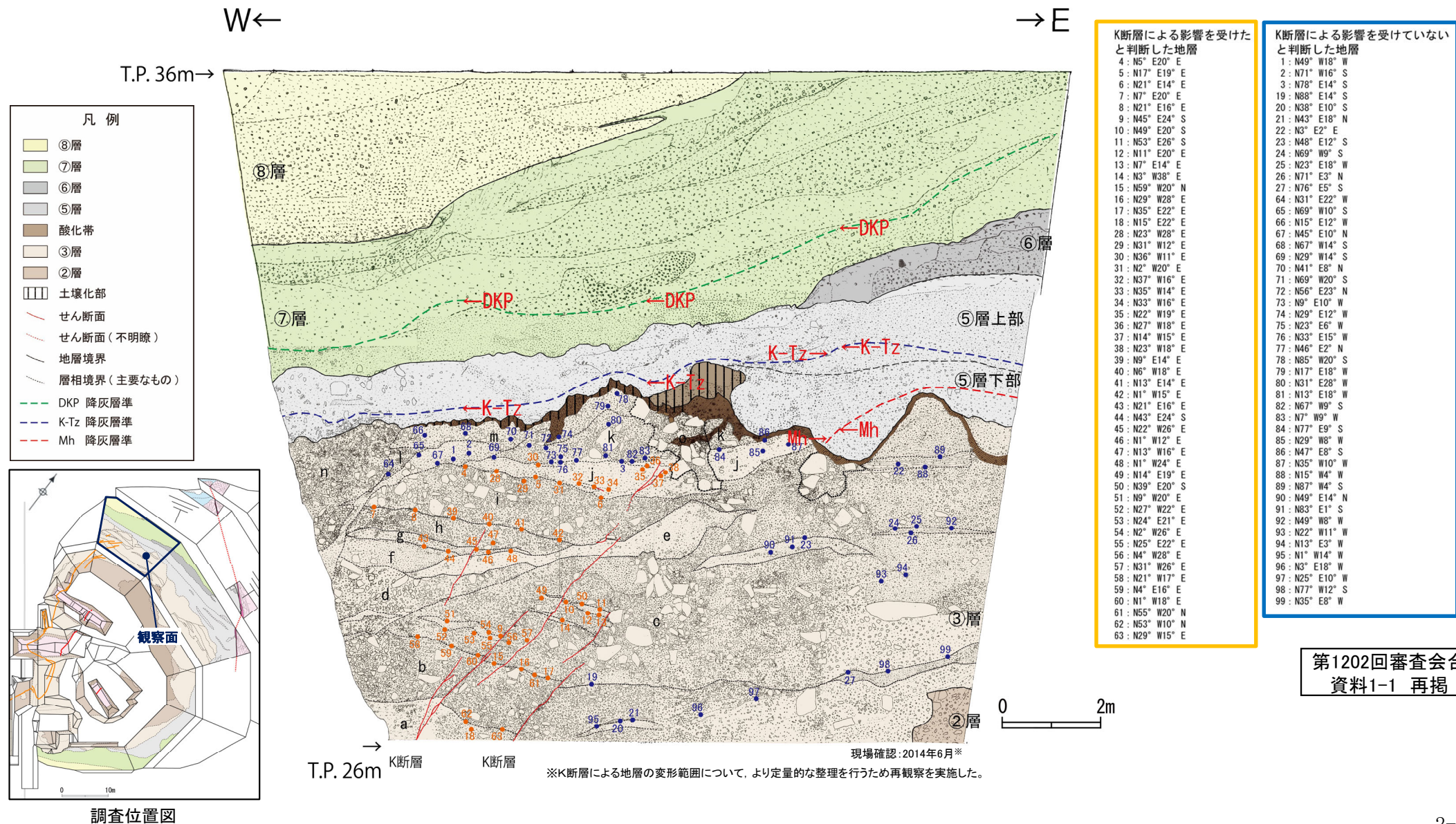


図-8 豊浦標準砂地盤における剪断層の発達過程
(D_v:底盤の鉛直変位量)
(基盤の逆断層傾斜角:75°, 地盤の層厚:400mm)

上田・谷(1999)に加筆

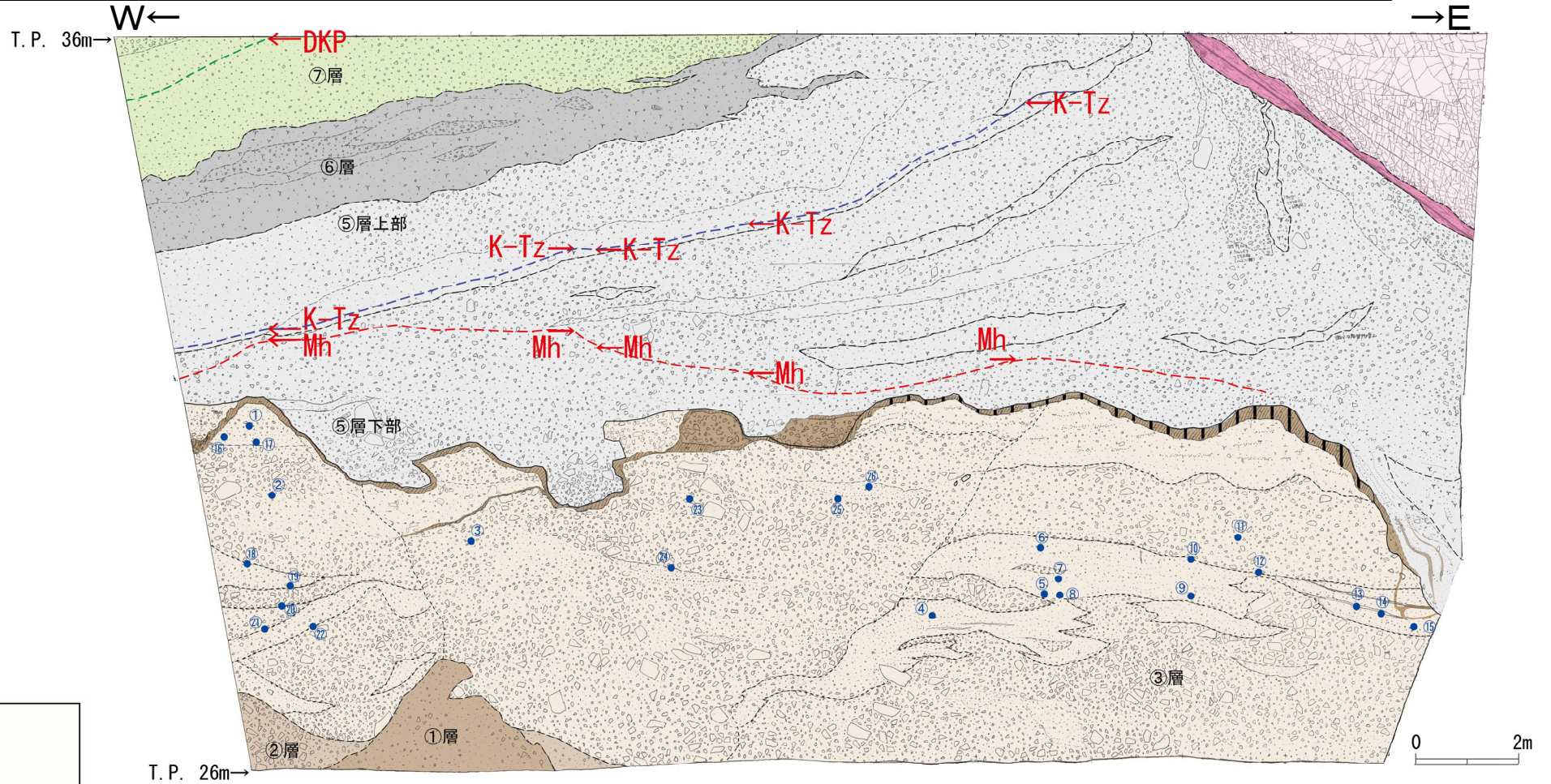
2.3.1 活動性評価(北西法面) K断層による地層の変形範囲の把握 (北西法面における地層の走向・傾斜)

- K断層による地層の変形範囲について、より定量的な整理を行うため、奥行き方向へ掘削する前の観察法面における③層中の層理や葉理の走向・傾斜について、シュミットネット下半球法線投影による整理に基づき検討した。
- 最初に、法面観察の結果を踏まえ、③層中の地層の走向・傾斜について、K断層による変位・変形の影響を受けているj層以下の地層のうち、K断層を含む西側の範囲の地層を「K断層による影響を受けたと判断した地層」のグループとし、K断層よりも東側の範囲の地層及びK断層による変位・変形の影響を受けていないk層以上の地層を合わせたものを「K断層による影響を受けていないと判断した地層」のグループとした。
- D-1トレンチ北西法面において、上記で記載した層理や葉理の走向・傾斜取得位置を示す。



2.3.1 活動性評価(北西法面) K断層による地層の変形範囲の把握 (北法面における地層の走向・傾斜)

・D-1トレンチ北法面において、層理や葉理の走向・傾斜取得位置を示す。



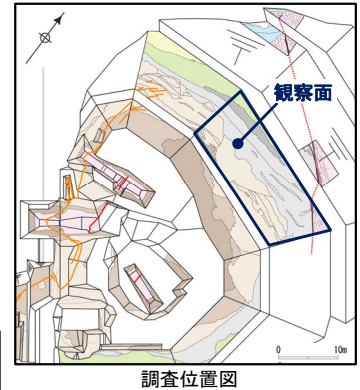
- 凡例
- ⑦層
 - ⑥層
 - ⑤層
 - 酸化帯
 - ③層
 - ②層
 - ①層
 - 花崗斑岩
 - 破砕帯
 - 土壤化部
 - 地層境界
 - 層相境界(主要なもの)
 - DKP 降灰層準
 - K-T 降灰層準
 - Mh 降灰層準

① : N85° E10° S	⑭ : N36° E12° S
② : N83° E21° S	⑮ : N69° E8° S
③ : N65° E18° S	⑯ : N45° W12° W
④ : N74° E18° S	⑰ : N75° E10° S
⑤ : N70° W7° S	⑱ : N71° W9° S
⑥ : N71° E5° S	⑲ : N59° W14° S
⑦ : N79° W8° S	⑳ : N45° W8° W
⑧ : N64° E6° S	㉑ : N42° E24° W
⑨ : N66° E18° E	㉒ : N55° E23° N
⑩ : N79° W18° S	㉓ : N89° W6° S
⑪ : N78° E18° S	㉔ : N63° W8° S
⑫ : N59° W10° S	㉕ : N69° W18° S
⑬ : N56° E11° S	㉖ : N71° E14° S

□ K断層による影響を受けていないと判断した地層

現場確認:2012年12月

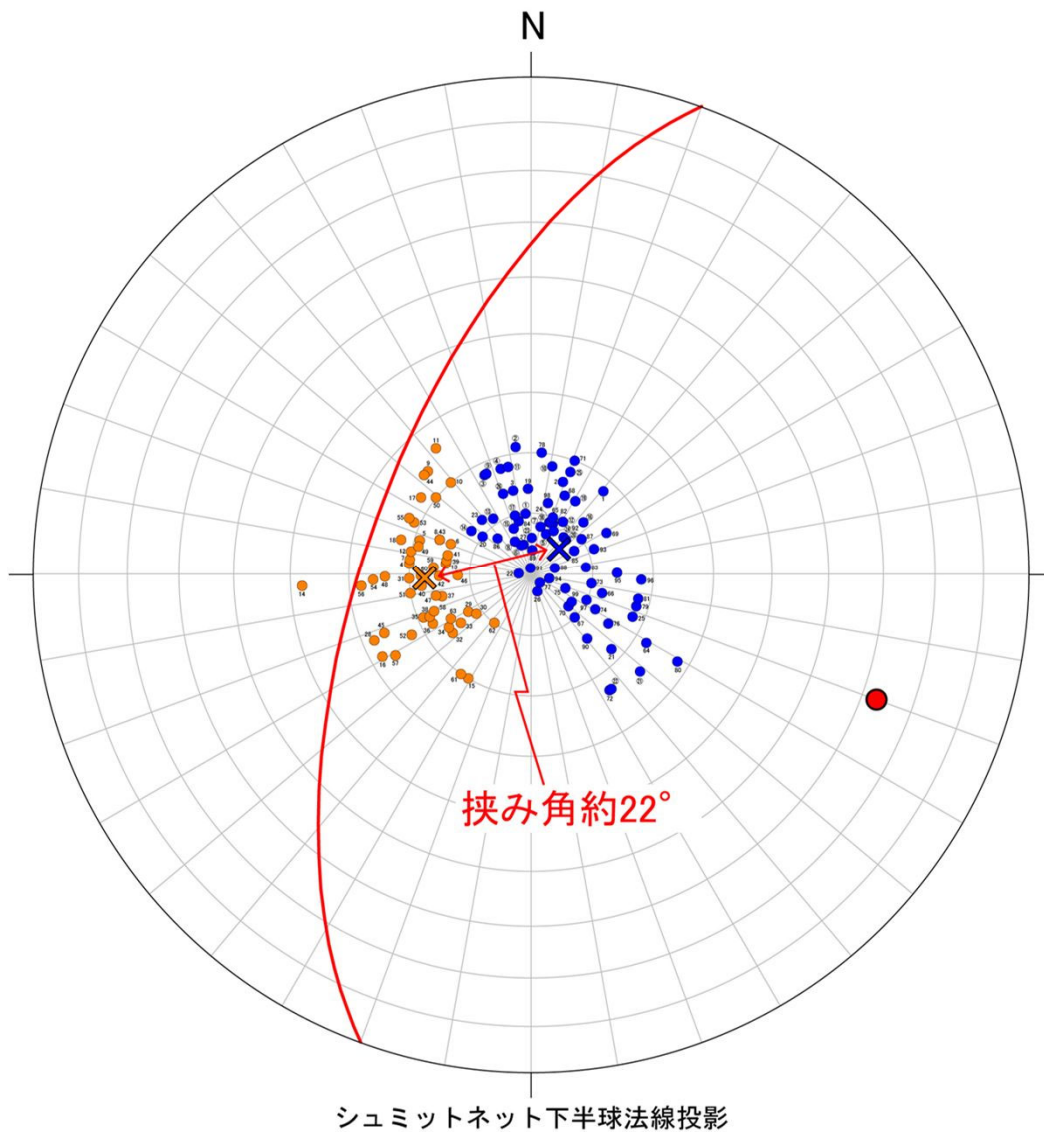
第1202回審査会合
資料1-1 再掲



2.3.1 活動性評価(北西法面) K断層による地層の変形範囲の把握(北西法面, 北法面における地層の走向・傾斜)

- 「K断層による影響を受けたと判断した地層」のグループは東傾斜のものが多く、「K断層による影響を受けていないと判断した地層」のグループは南傾斜ないしは西傾斜である。
- 2つのグループの最大中心点の傾斜は20°程度の差を有しており、概ね南北方向を軸として西側が上昇する方向に回転している状況が認められ、概ね南北方向の走向を持つK断層が西側隆起の逆断層センスであることと調和的である。

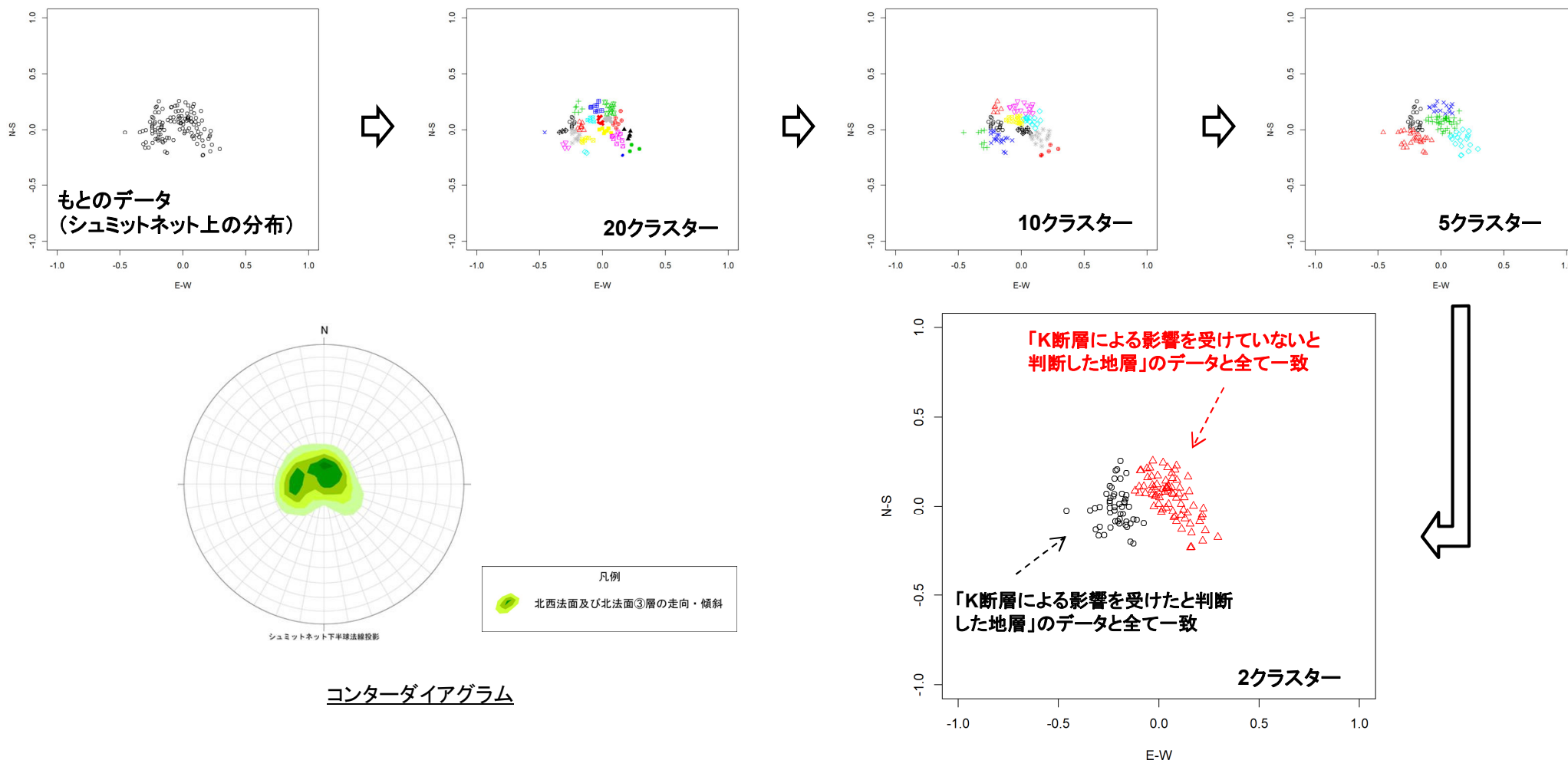
第1202回審査会合
資料1-1 再掲



- 凡例
- 北西法面におけるK断層の走向・傾斜 (N20° E63° W)
 - K断層による影響を受けたと判断した地層
 - ✕ K断層による影響を受けたと判断した地層 (平均値: N2° W17° E)
 - K断層による影響を受けてないと判断した地層
 - ✕ K断層による影響を受けてないと判断した地層 (平均値: N43° W6° W)

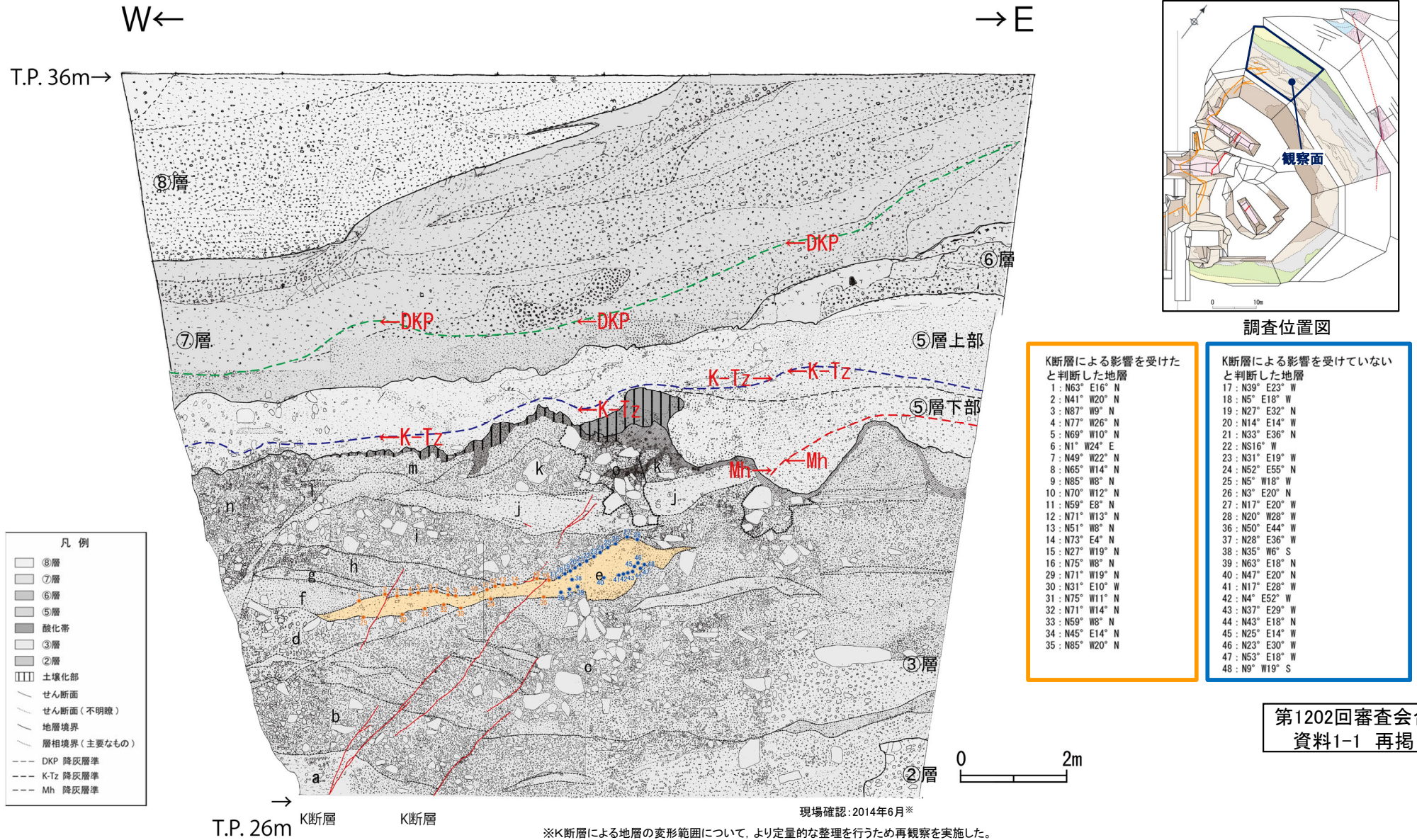
2.3.1 活動性評価(北西法面) K断層による地層の変形範囲の把握 (クラスター分析結果)

- 「K断層による影響を受けたと判断した地層」と「K断層による影響を受けていないと判断した地層」のグループに大別することの妥当性を確認するため、クラスター分析において広く用いられているワード法に基づき検討した。
- その結果、最終クラスター数を2つとした場合、それぞれのクラスターが「K断層による影響を受けたと判断した地層」と「K断層による影響を受けていないと判断した地層」と一致し、法面観察に基づき類似したものを適切にグループ化していることを表していることから、K断層によって影響を受けた範囲と受けていない範囲を適切に把握出来ているものと判断した。



2.3.1 活動性評価(北西法面) K断層による地層の変形範囲の把握 (北西法面e層における地層の走向・傾斜)

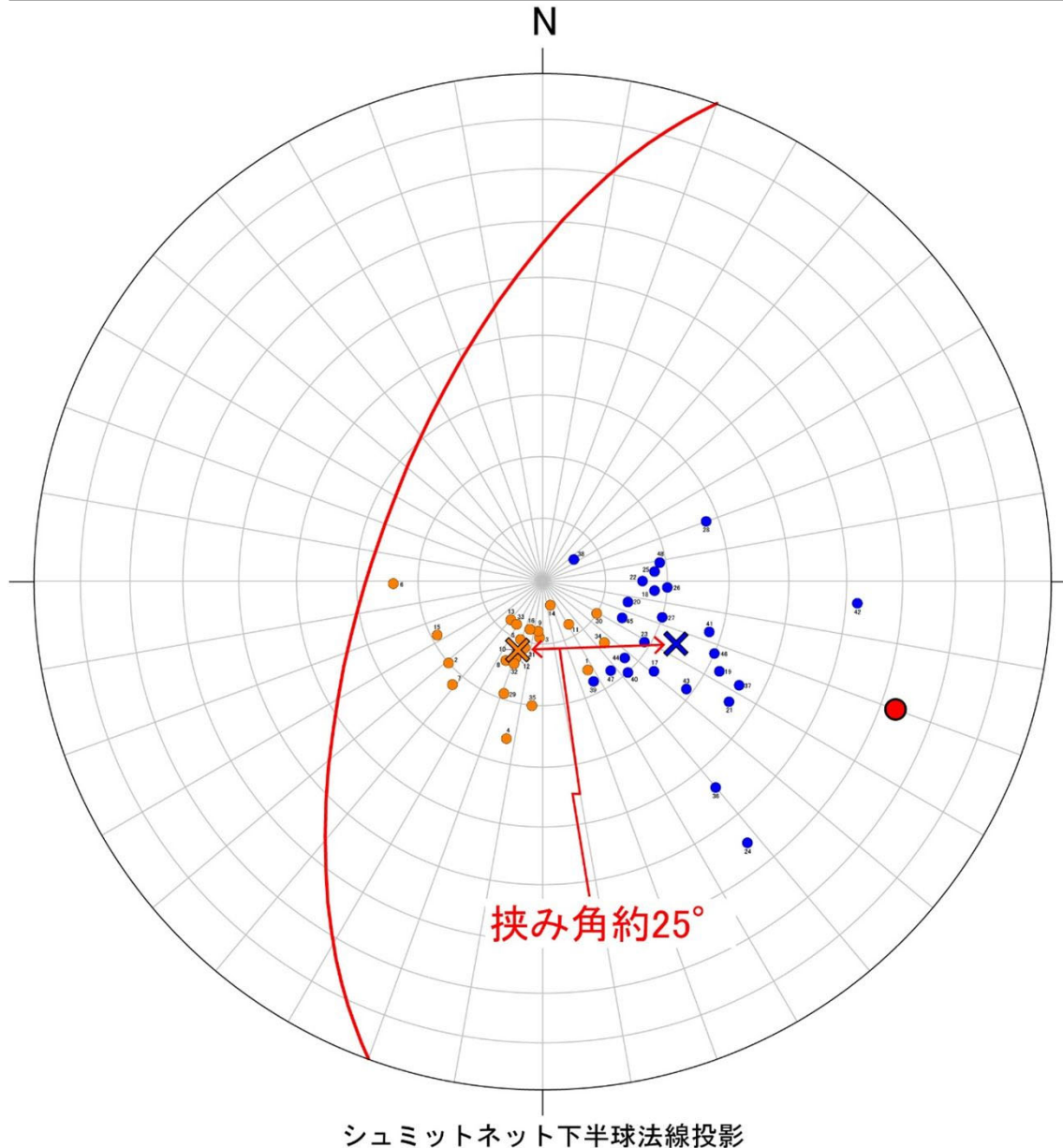
- D-1トレンチ北西法面において、隣接する地層の走向・傾斜とは異なる③層中のe層について、K断層を含む西側の範囲のe層を「**K断層による影響を受けたと判断した地層**」のグループとし、K断層よりも東側の範囲のe層を「**K断層による影響を受けていないと判断した地層**」のグループとし、同様の検討を行った。
- e層の層理や葉理の走向・傾斜取得位置を示す。



2.3.1 活動性評価(北西法面) K断層による地層の変形範囲の把握 (北西法面e層における地層の走向・傾斜)

- 「K断層による影響を受けたと判断した地層」のグループは主として北東傾斜であり、「K断層による影響を受けていないと判断した地層」のグループは主として北西傾斜である。
- 2つのグループの最大中心点の傾斜は20° 程度の差を有しており、概ね南北方向を軸として西側が上昇する方向に回転している状況が認められ、概ね南北方向の走向を持つK断層が西側隆起の逆断層センスであることと調和的である。

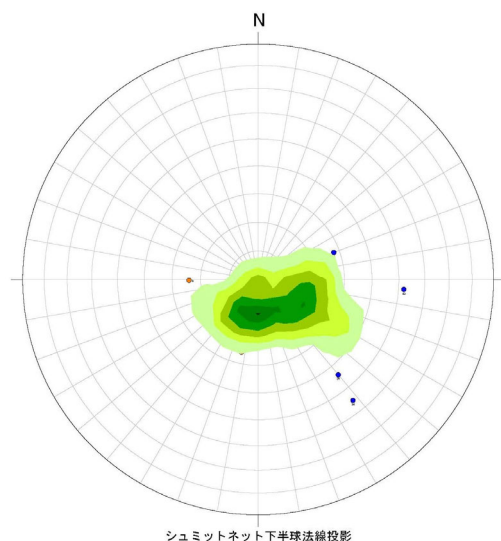
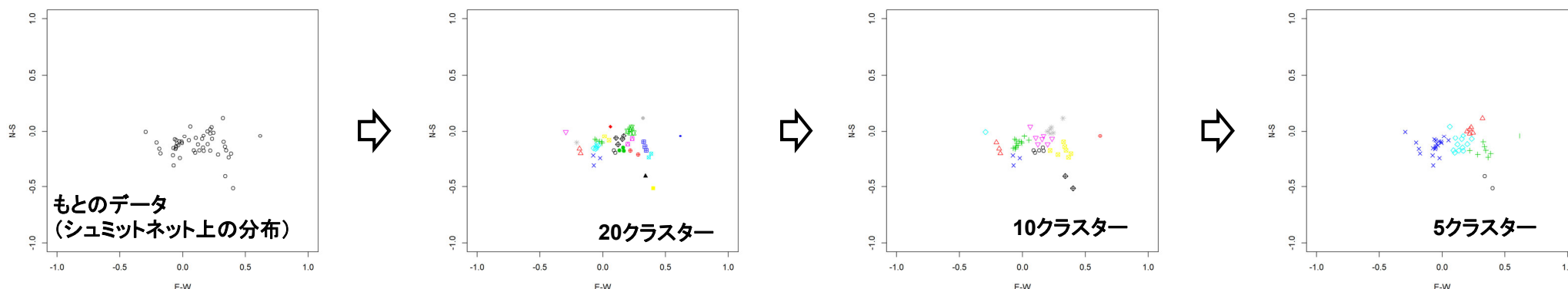
第1202回審査会合
資料1-1 再掲




- 凡例
- 北西法面におけるK断層の走向・傾斜 (N20° E63° W)
 - K断層による影響を受けたと判断した地層
 - × K断層による影響を受けたと判断した地層 (平均値 : N70° W12° N)
 - K断層による影響を受けていないと判断した地層
 - × K断層による影響を受けていないと判断した地層 (平均値 : N25° E24° W)

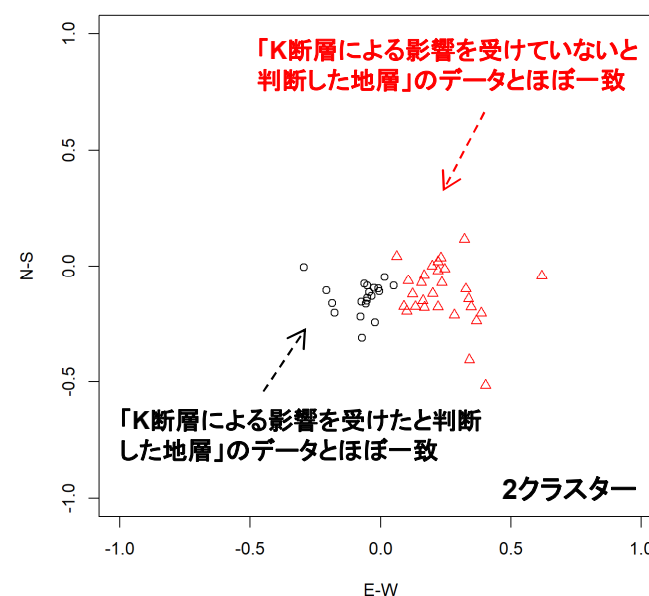
2.3.1 活動性評価(北西法面) K断層による地層の変形範囲の把握 (クラスター分析結果)

- 「K断層による影響を受けたと判断した地層」と「K断層による影響を受けていないと判断した地層」のグループに大別することの妥当性を確認するため、クラスター分析において広く用いられているワード法に基づき検討した。
- その結果、最終クラスター数を2つとした場合、それぞれのクラスターが「K断層による影響を受けたと判断した地層」と「K断層による影響を受けていないと判断した地層」と一致し、法面観察に基づき類似したものを適切にグループ化していることを表していることから、K断層によって影響を受けたe層の範囲と受けていないe層の範囲を適切に把握出来ているものと判断した。



凡例
 北西法面③層 e層の走向・傾斜

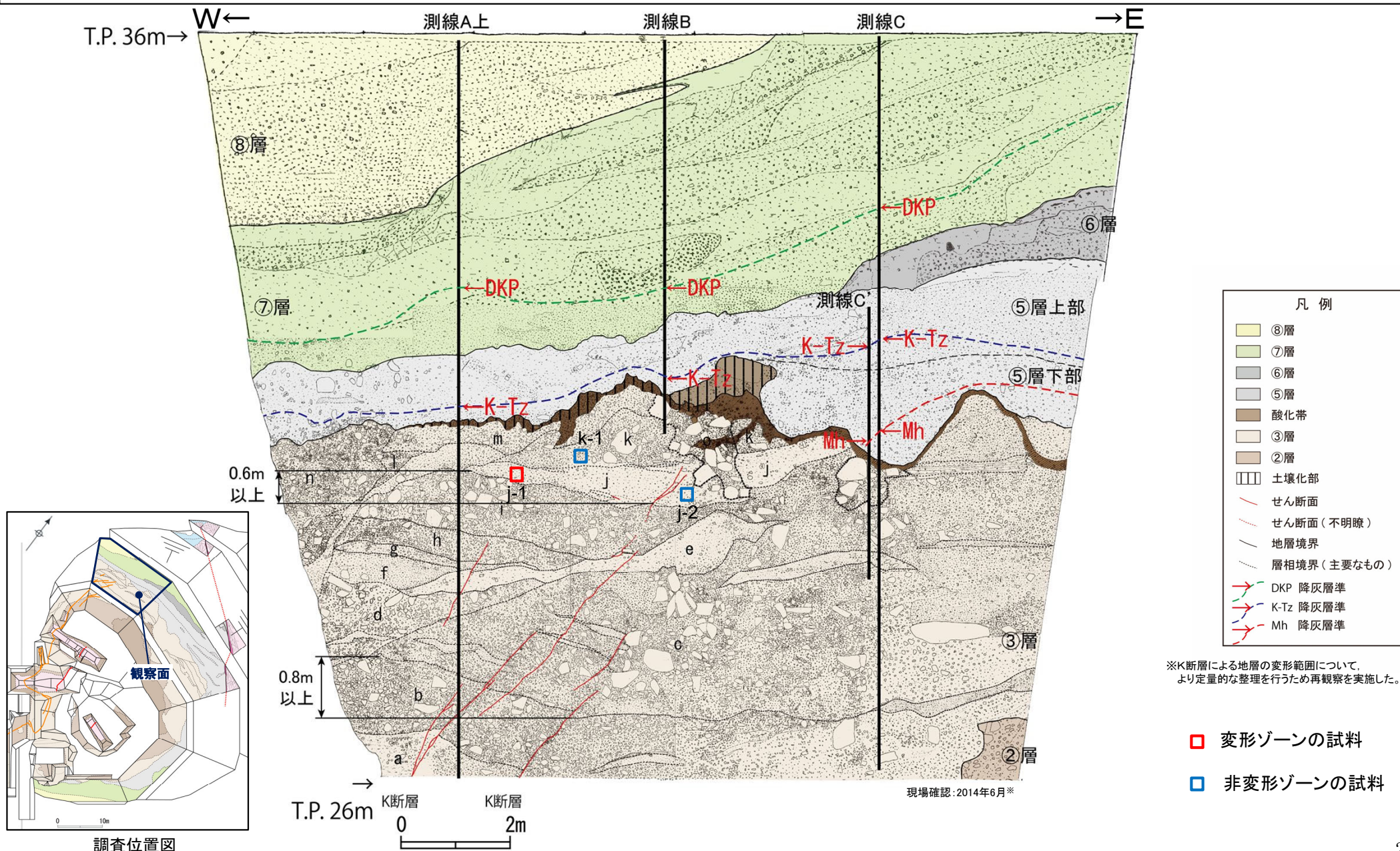
コンターダイアグラム



2.3.1 活動性評価(北西法面) K断層による地層の変形範囲の把握 (地層の堆積状況の詳細)

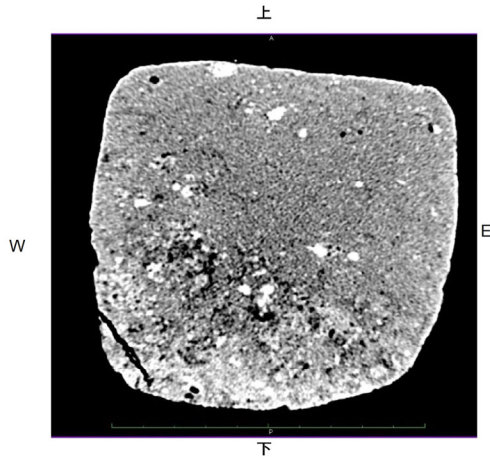
第1202回審査会合
資料1-1 再掲

- K断層による影響を受けたj層西側の地層と受けていない層東側の地層及びk層の堆積状況についても、さらに詳細に把握するため、**ブロックサンプルのCT観察**を行った。
- その結果、K断層によって変形を受けたj層西側の地層については**堆積構造が東に傾斜している**ことが確認されたが、K断層による変形を受けていない層東側の地層及びk層については**ほぼ水平に堆積している**状況がCT観察からも確認された。
- D-1トレンチ北西法面のブロックサンプル取得位置を示す。

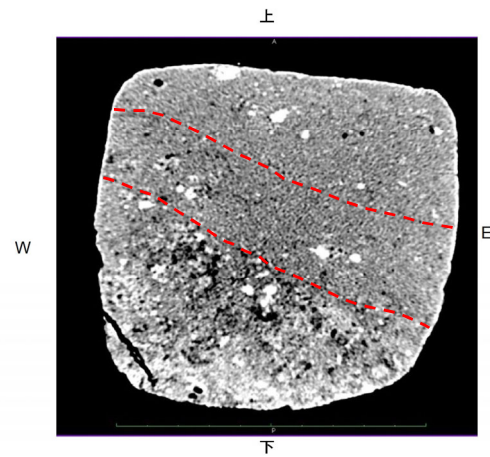


2.3.1 活動性評価(北西法面) K断層による地層の変形範囲の把握 (地層の堆積状況の詳細)

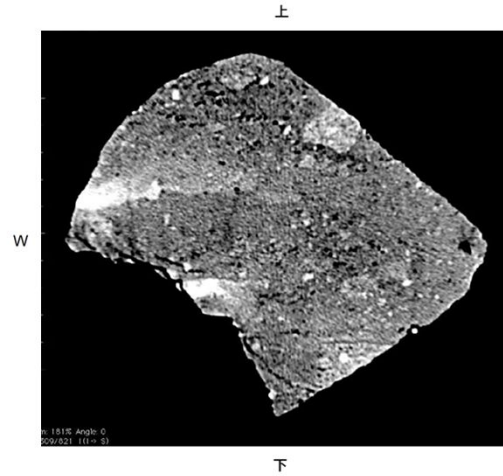
- K断層によって変形を受けたj層西側の地層については堆積構造が東に傾斜していることが確認されたが、K断層による変形を受けていないj層東側の地層及びk層についてはほぼ水平に堆積している状況がCT観察からも確認された。



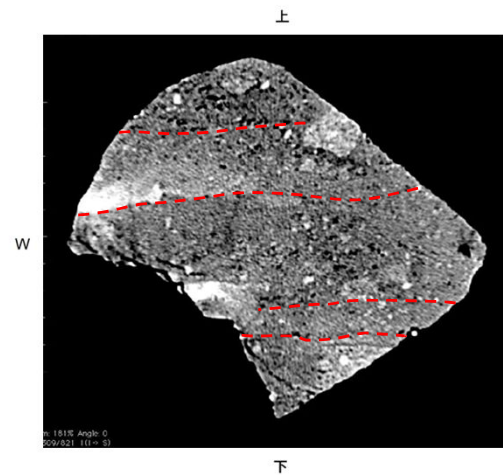
j-1 (K断層による影響を受けたj層西側)



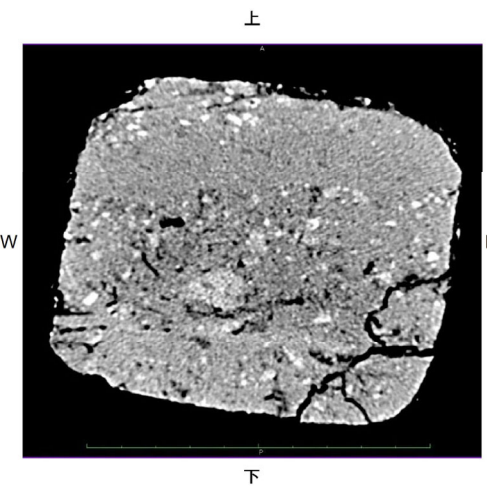
j-1 (K断層による影響を受けたj層西側)



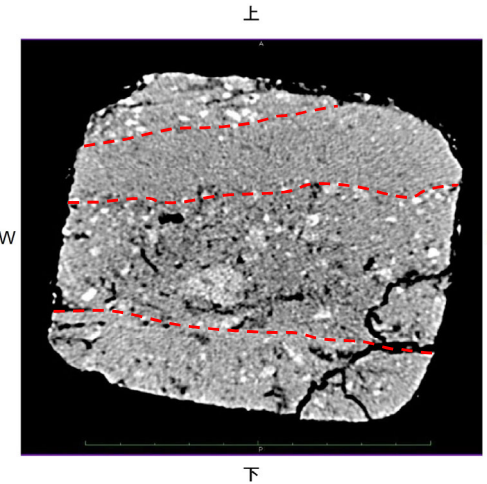
j-2 (K断層による影響を受けていないj層東側)



j-2 (K断層による影響を受けていないj層東側)



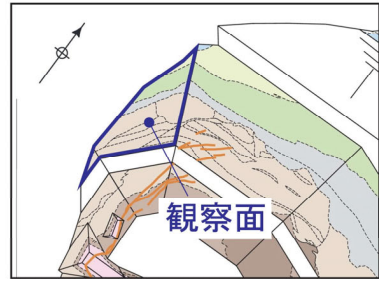
k-1 (K断層による影響を受けていないk層)



k-1 (K断層による影響を受けていないk層)

※試料はいずれも定方位で採取し、定方位を維持した状態でCT撮影を行った。  : 堆積構造

2.3.1 活動性評価(西法面 スケッチ)

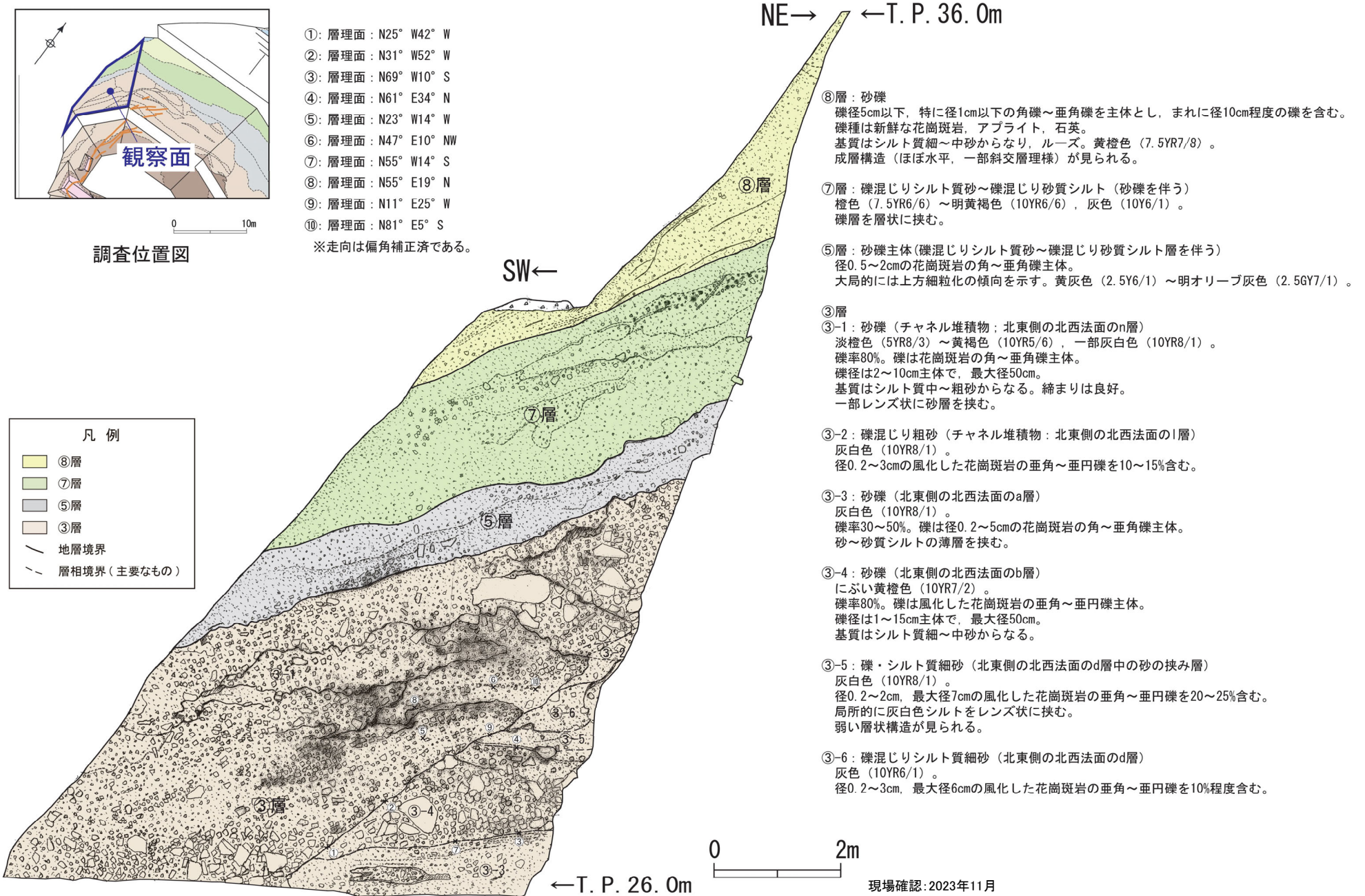
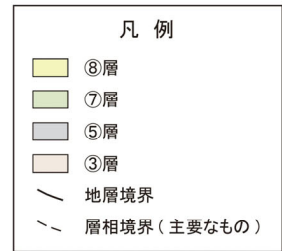


調査位置図

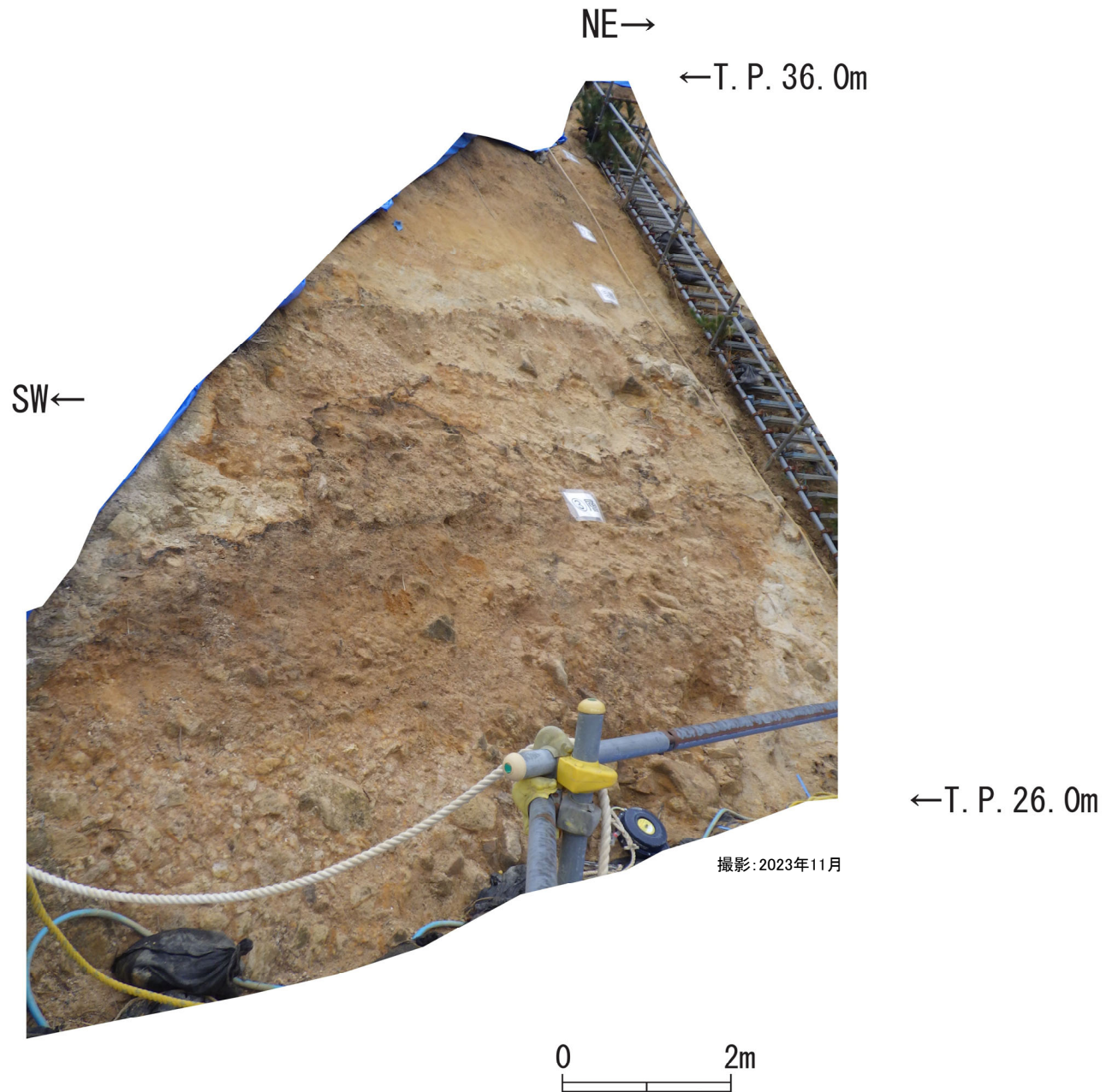
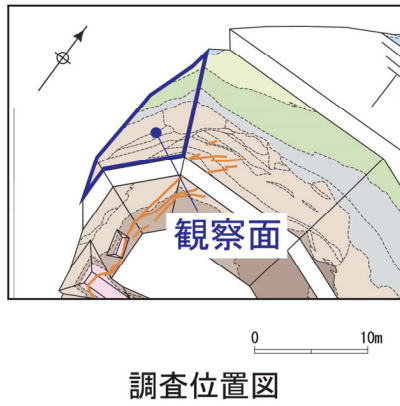
- ①: 層理面: N25° W42° W
- ②: 層理面: N31° W52° W
- ③: 層理面: N69° W10° S
- ④: 層理面: N61° E34° N
- ⑤: 層理面: N23° W14° W
- ⑥: 層理面: N47° E10° NW
- ⑦: 層理面: N55° W14° S
- ⑧: 層理面: N55° E19° N
- ⑨: 層理面: N11° E25° W
- ⑩: 層理面: N81° E5° S

※走向は偏角補正済である。

NE → ← T. P. 36. 0m



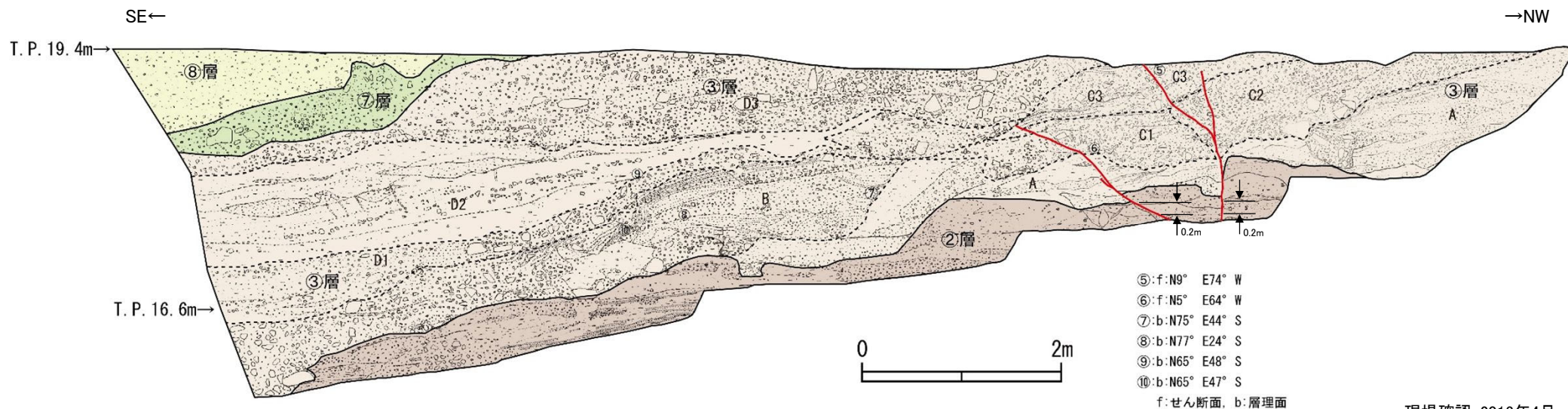
2.3.1 活動性評価(西法面 写真)



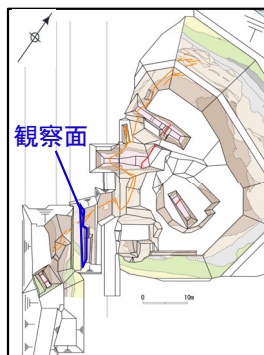
2.3.2 活動性評価(原電道路ピット)

2.3.2 活動性評価(原電道路ピット) (原電道路ピット東向き法面 スケッチ)

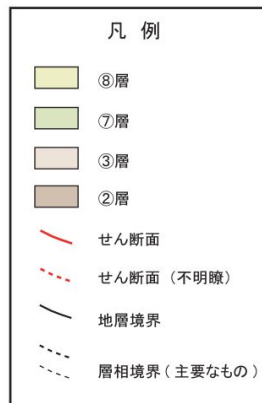
・原電道路ピット東向き法面で認められるK断層は、②層及び③層中のC層までの地層に変位を与えているが、その直上に分布する③層中のD3層は変位・変形を受けておらず、D3層は下位のC層とは明瞭な傾斜不整合関係で接している。同法面では、K断層は数条に分岐しており、②層中の地層を変位基準とした鉛直変位量は合計で0.4mである。



現場確認: 2013年4月



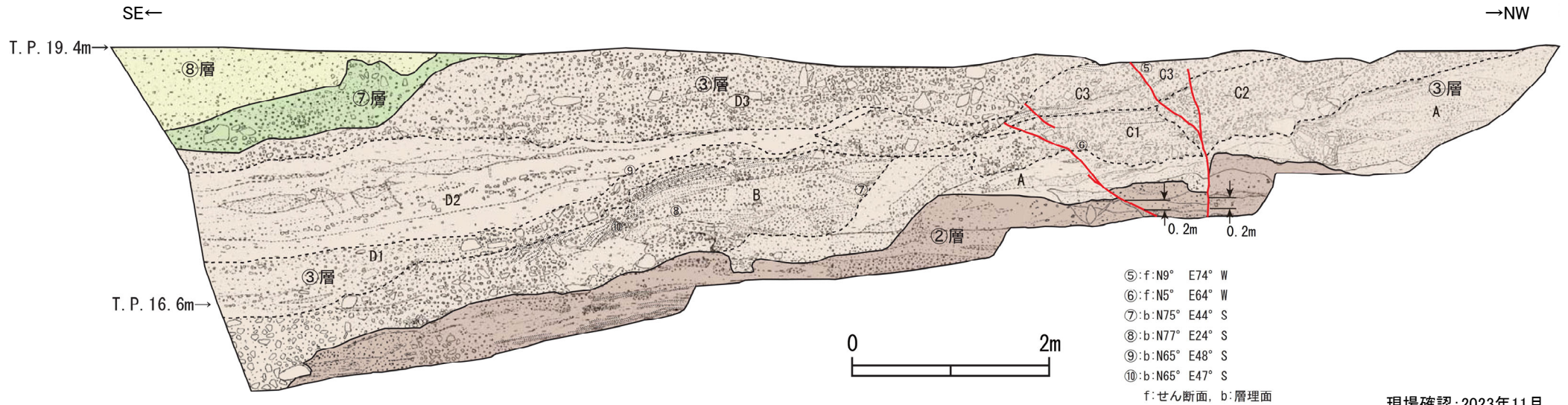
調査位置図



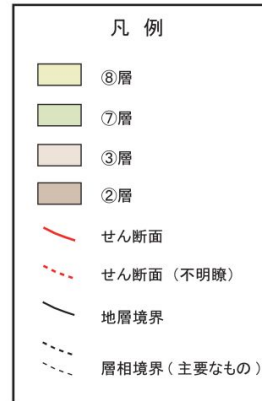
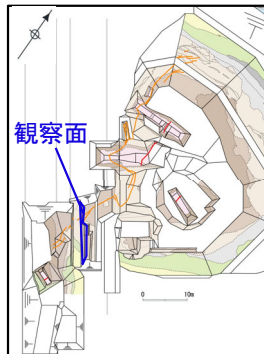
- ⑧層: 細礫・シルト混じり砂を主体とする。橙色(5YR6/6)。礫率5~10%で、礫は径2~4cm程度の亜角礫を含む。基質は、シルト質細砂からなり、細礫混じり砂質シルト、砂混じり粘土及び砂質シルトをレンズ状~層状に挟在する。
- ⑦層: 礫混じり砂質シルト~砂礫からなる。明赤褐色(5YR5/6)~橙色(7.5YR7/6) 礫率7~40%程度で径3~40cm程度の亜角~亜円礫からなる。基質は、シルト混じり細~中粒砂からなる。下部ほど礫の含有量が多い。
- ③層 (C,D): 砂礫及びシルト混じり細砂を主体とする。橙色~明褐色(7.5YR6/6~7.5YR5/6) 礫率15~40%で径1~10cm程度(最大径40cm)の角~亜円礫からなる。基質は、シルト混じり細粒砂からなる。
(A,B): 砂礫を主体とする。浅黄色(2.5Y7/3) 礫率20%程度で径1~7cm程度(最大径25cm)の亜角~亜円礫からなる。基質は、シルト混じり細粒砂からなる。
- ②層: 細礫・砂混じりシルトを主体とする。灰白色(2.5Y7/1) 礫率3~5%で径5cm以下の角~亜角礫を含む。基質は、シルト混じり細粒砂~砂混じりシルトからなり、砂層をレンズ状に挟在する。

2.3.2 活動性評価(原電道路ピット) (原電道路ピット東向き法面 スケッチ)

・原電道路ピット東向き法面で認められるK断層は、②層及び③層中のC層までの地層に変位を与えているが、その直上に分布する③層中のD3層は変位・変形を受けておらず、D3層は下位のC層とは明瞭な傾斜不整合関係で接している。同法面では、K断層は数条に分岐しており、②層中の地層を変位基準とした鉛直変位量は合計で0.4mである。



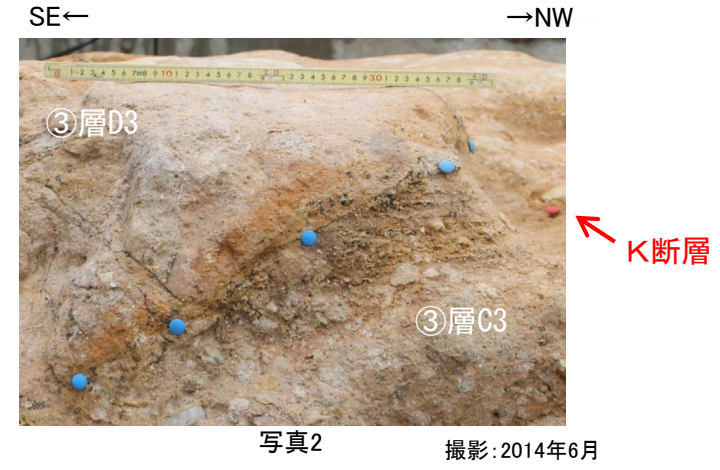
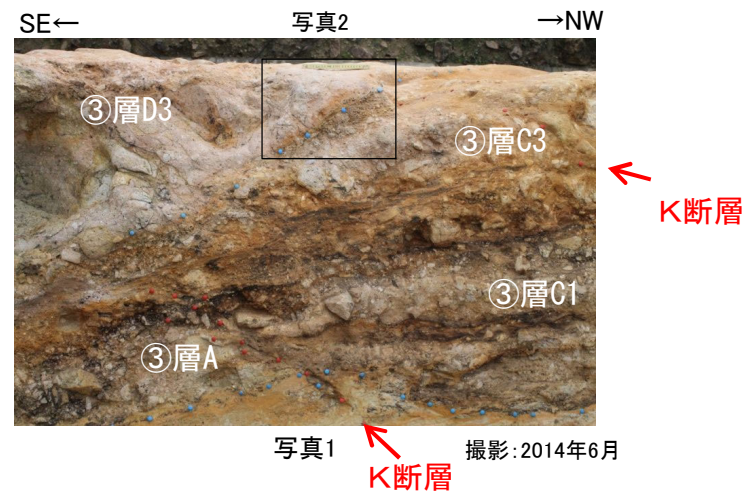
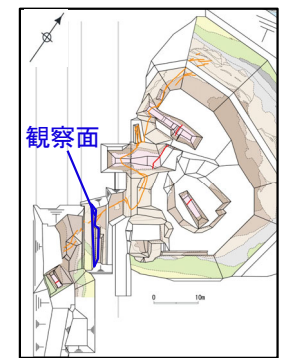
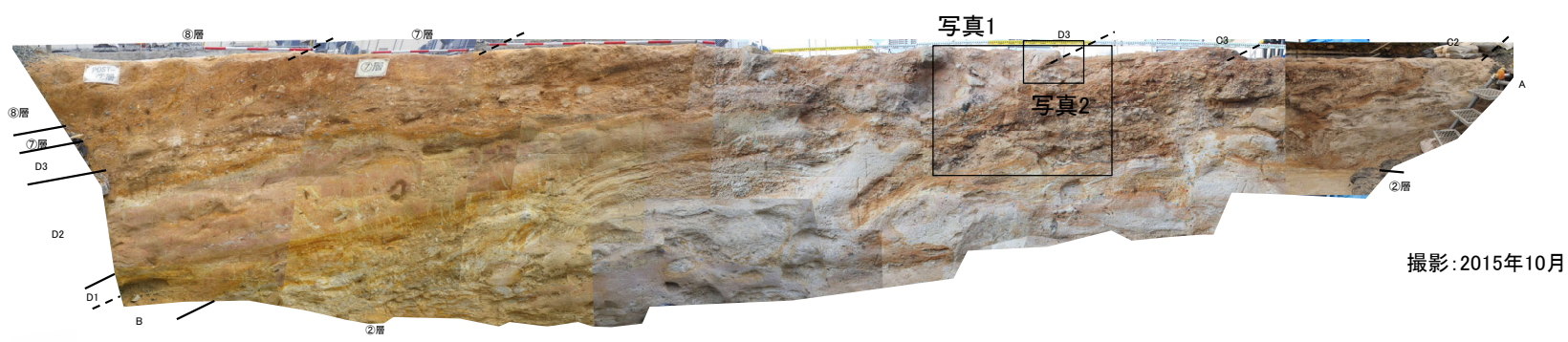
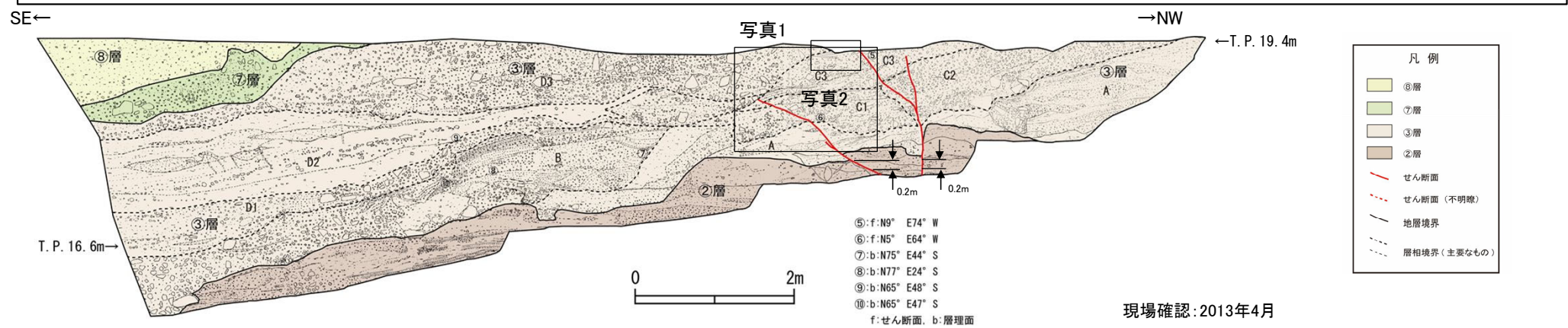
現場確認:2023年11月



- ⑧層: 細礫・シルト混じり砂を主体とする。橙色(5YR6/6)。礫率5~10%で、礫は径2~4cm程度の亜角礫を含む。基質は、シルト質細砂からなり、細礫混じり砂質シルト、砂混じり粘土及び砂質シルトをレンズ状~層状に挟在する。
- ⑦層: 礫混じり砂質シルト~砂礫からなる。明赤褐色(5YR5/6)~橙色(7.5YR7/6) 礫率7~40%程度で径3~40cm程度の亜角~亜円礫からなる。基質は、シルト混じり細~中粒砂からなる。下部ほど礫の含有量が多い。
- ③層 (C,D): 砂礫及びシルト混じり細砂を主体とする。橙色~明褐色(7.5YR6/6~7.5YR5/6) 礫率15~40%で径1~10cm程度(最大径40cm)の角~亜円礫からなる。基質は、シルト混じり細粒砂からなる。
- (A,B): 砂礫を主体とする。浅黄色(2.5Y7/3) 礫率20%程度で径1~7cm程度(最大径25cm)の亜角~亜円礫からなる。基質は、シルト混じり細粒砂からなる。
- ②層: 細礫・砂混じりシルトを主体とする。灰白色(2.5Y7/1) 礫率3~5%で径5cm以下の角~亜角礫を含む。基質は、シルト混じり細粒砂~砂混じりシルトからなり、砂層をレンズ状に挟在する。

2.3.2 活動性評価(原電道路ピット) (原電道路ピット東向き法面)

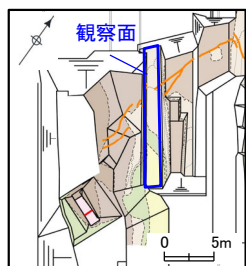
- 原電道路ピット東向き法面で認められるK断層は、②層及び③層中のC層までの地層に変位を与えているが、その直上に分布する③層中のD3層は変位・変形を受けておらず、D3層は下位のC層とは明瞭な傾斜不整合関係で接している。同法面では、K断層は数条に分岐しており、②層中の地層を変位基準とした鉛直変位量は合計で0.4mである。
- 原電道路ピット東向き法面のスケッチと写真及びK断層が通過している付近の拡大写真を示す。



③層下部中には南に緩傾斜する堆積構造が見られるが(写真1)、③層下部の最上部の砂層はほぼ水平な層理を示す(写真2)。

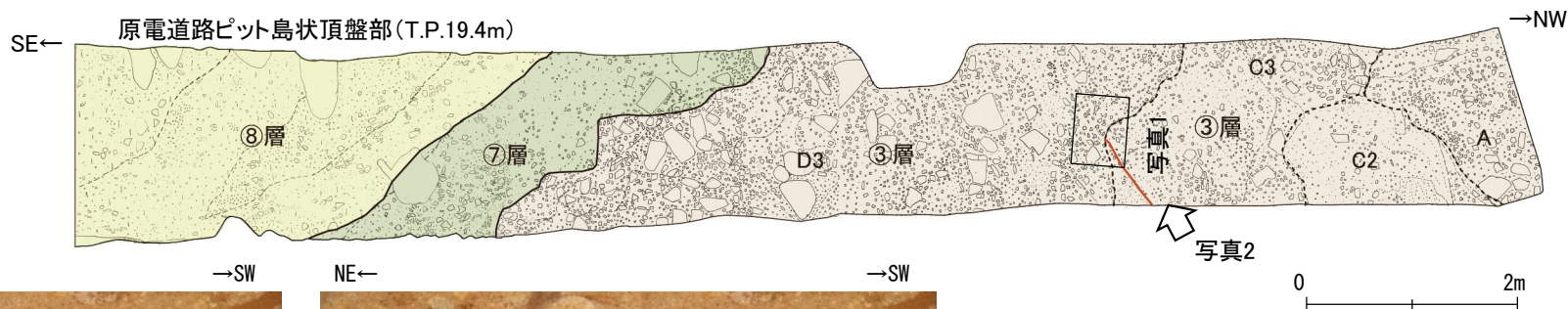
2.3.2 活動性評価(原電道路ピット) (原電道路ピット島状頂盤部)

• 原電道路ピット島状頂盤部において、K断層は③層中のC層までの地層に変位を与えているが、その上位の地層である直上に分布する③層中のD3層は変位・変形を受けておらず、D3層は下位のC層とは明瞭な傾斜不整合関係で接している。



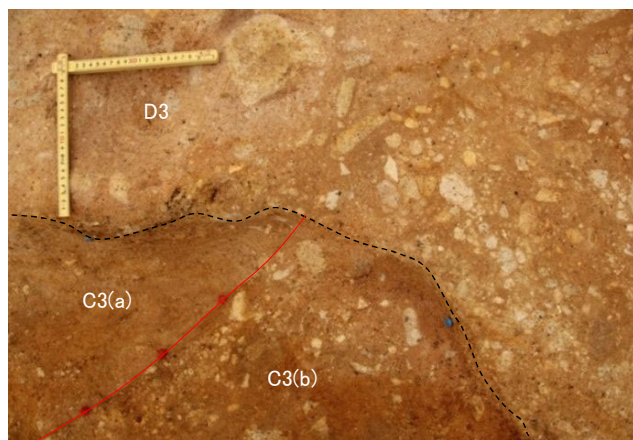
調査位置図

写真(拡大①)及びスケッチ



拡大①

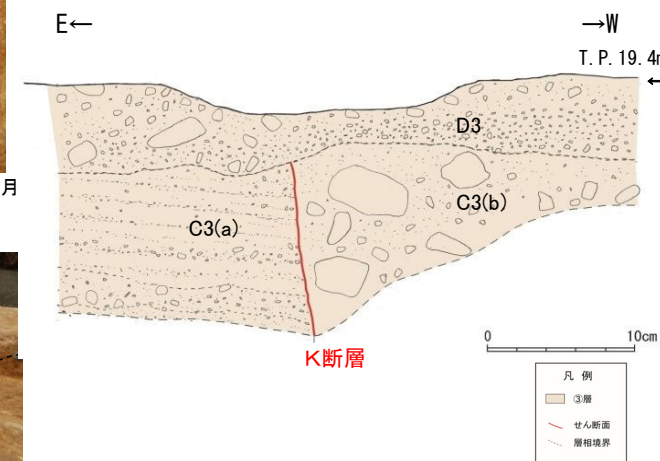
撮影:2014年5月



K断層

拡大①

撮影:2014年5月



C3層 (a): 礫混じりシルト質砂

明褐色を呈する。砂は細～中粒砂からなり、径3～10mm程度の亜角～亜円礫を含む。下部ほど礫率が高く、下位の砂礫とは漸移する。

C3層 (b): 砂礫

明褐色～橙色を呈する。礫率は15%程度である。径10～50mmの風化した亜角～亜円礫を含む。基質はシルト質砂からなる。

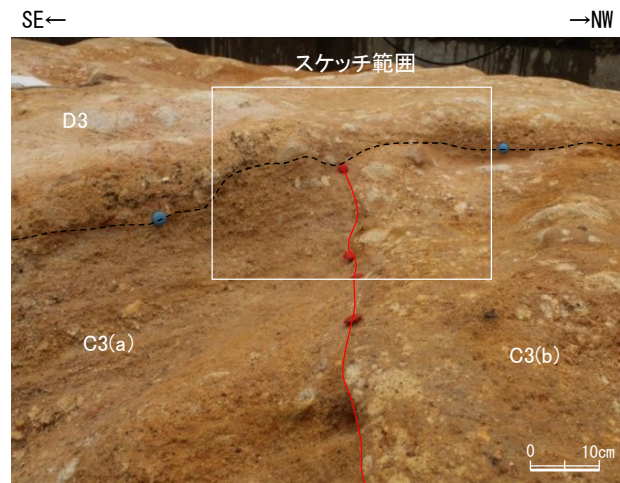
D3層: 砂礫

明褐色～橙色を呈する。礫率は20%程度である。径10～40mmの風化した亜角～亜円礫を含む。基質はシルト質砂からなる。



拡大①(側面から撮影)

撮影:2014年6月



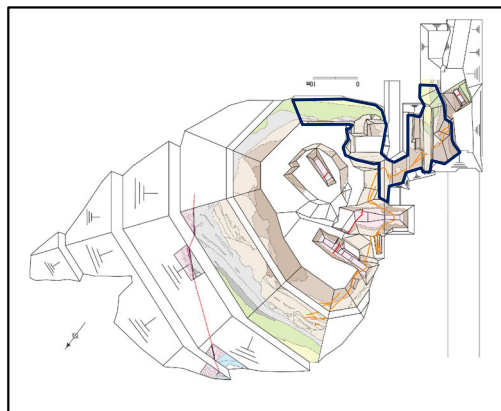
拡大①(側面から撮影) K断層

撮影:2014年6月

現場確認:2014年6月

2.3.2 活動性評価(原電道路ピット) 原電道路ピット③層の分布 (原電道路ピット付近の地質分布)

・D-1トレンチ擁壁撤去法面, 原電道路ピット及びふげん道路ピット付近に分布する③層は, D-1トレンチ入口南側法面まで連続して分布している。



展開図範囲図

2.3.2 活動性評価(原電道路ピット) 原電道路ピット③層の分布 (原電道路ピット付近の地質分布)

• D-1トレンチ擁壁撤去法面, 原電道路ピット及びふげん道路ピット付近に分布する③層は, D-1トレンチ入口南側法面まで連続して分布している。









展開図範囲図

現場確認: 2023年11月

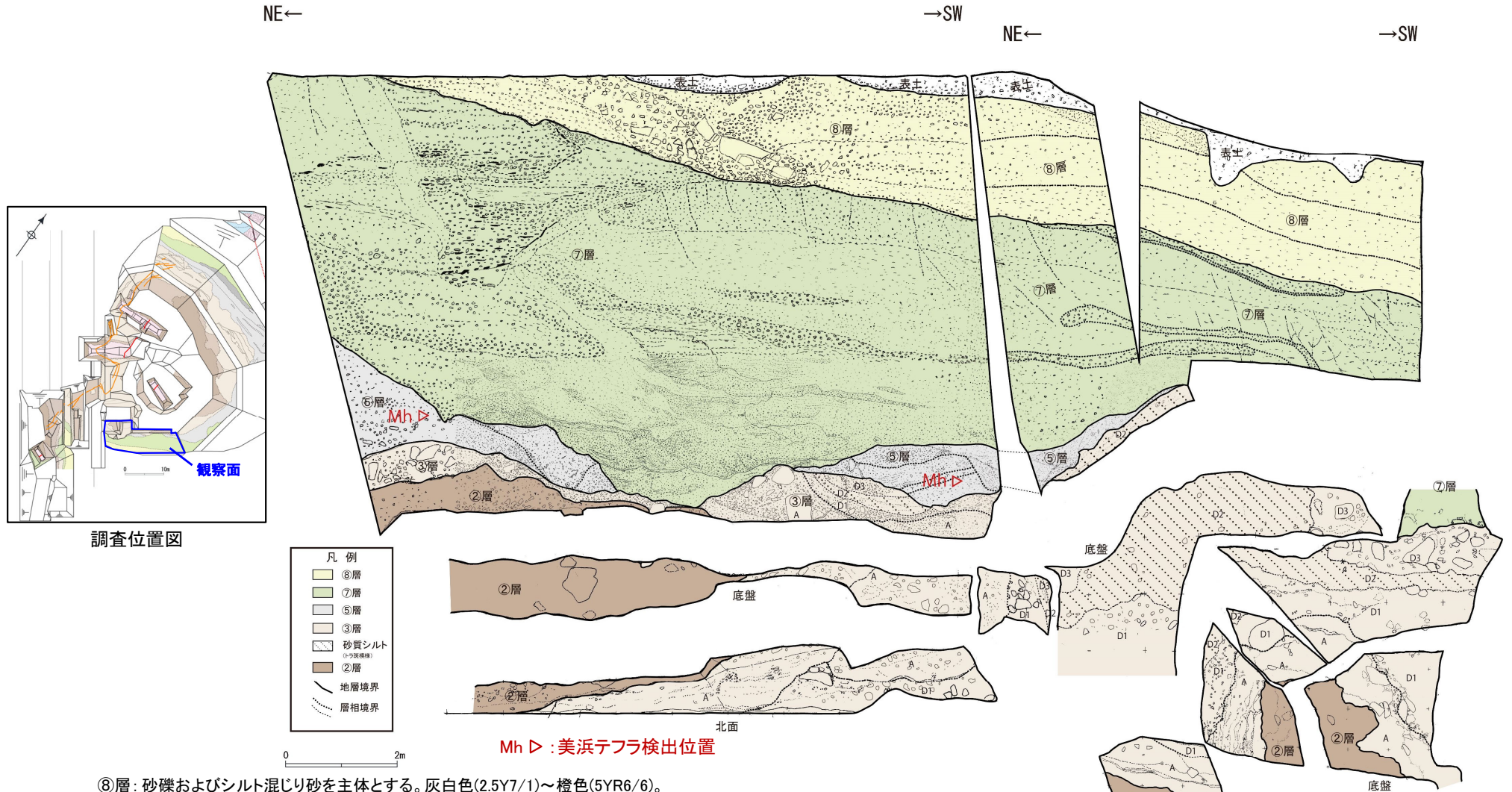
2.3.2 活動性評価(原電道路ピット) (原電道路ピットとD-1トレンチ入口南側法面 ③層の対比)

- 原電道路ピット及びふげん道路ピット東法面に見られる③層中のD1層, D2層及びD3層は, D-1トレンチ入口南側法面まで連続して分布しており, 南側法面ではD1層, D2層及びD3層が⑤層に不整合関係で覆われている。
- 原電道路ピットの③層中のD1層, D2層及びD3層は, 層相の類似性からもD-1トレンチの③層に対比される。

地層名	地層区分	原電道路ピット		D-1トレンチ入口南側法面	
		写真	性状	写真	性状
③層	D3		<p>砂礫(浅黄橙色主体) 径1~3cmの礫(最大径25cm) を主体とし, 基質は砂からなる。</p>		<p>砂礫(浅黄橙色主体) 径2~5cmの礫(最大径50cm) を主体とし, 基質は砂からなる。</p>
	D2		<p>シルト質砂~礫混じり砂質シルト(にぶい橙色主体) 部分的に礫が混じるが, シルト~中粒砂からなる。 風化の影響により斑状模様を呈する。</p>		<p>礫混じり砂質シルト (にぶい橙色主体) 部分的に礫が混じるが, シルト~中粒砂からなる。 風化の影響により斑状模様を呈する。</p>
	D1		<p>砂礫(橙色主体) 径1~3cmの礫(最大径15cm) を主体とし, 基質は砂からなる。 下位層を削り込んでいる。</p>		<p>砂礫(橙色主体) 径2~5cmの礫(最大径30cm) を主体とし, 基質は砂からなる。 下位層を削り込んでいる。</p>

2.3.2 活動性評価(原電道路ピット) テフラ分析結果 (D-1トレンチ入口南側法面)

・D-1トレンチ入口南側法面の⑤層からは、**美浜テフラ**が検出された。



- ⑧層: 砂礫およびシルト混じり砂を主体とする。灰白色(2.5Y7/1)～橙色(5YR6/6)。
- ⑦層: 礫混じり砂質シルト～砂礫からなる。全体に土壌化する。明赤褐色(5YR5/6)～橙色(7.5YR7/6)。
- ⑤層: 砂質シルト～砂礫。灰白色(N6/0)。
- ③層: A, B 堆積構造をもつシルト～砂と砂礫の互層。灰白色(5YR8/1)～明赤灰色(10R7/1)。
- C1 砂礫。灰白色(N7/0)～褐色(10YR4/6)。
 - C2 砂礫。灰白色(N7/0)～褐色(10YR4/6)。
 - C3 砂礫。灰白色(N7/0)～褐色(10YR4/6)。
 - D1 砂礫。灰白色(N7/0)～褐色(10YR4/6)。
 - D2 シルト～砂。トラ斑状を呈することが多い。灰白色(2.5Y7/1)～橙色(7.5YR7/6)。
 - D3 下位を削り込む砂礫。灰白色(2.5Y7/1)～橙色(7.5YR7/6)。
- ②層: 砂質シルトを主体とする。灰白色(2.5Y7/1)～橙色(7.5YR7/6)。

2.3.2 活動性評価(原電道路ピット) テフラ分析結果 (D-1トレンチ入口南側法面)

- D-1トレンチ入口南側法面のうち、測線Y付近の拡大スケッチと写真を示す。
- D-1トレンチ入口南側法面の⑤層からは、美浜テフラが検出された。

